瀬峰町文化財調査報告書第２集

長者原Ⅱ遺跡

昭和54年3月

瀬峰町教育委員会

栗原郡瀬峰町

長者原（ちょうじゃはら）Ⅱ遺跡

序

春夏秋冬、四季はめぐりて一年を終える。一年とは、8,760時間、まことに使い手のある時間である。人間の寿命も、今では百歳を超える人が多くなった。

しかし、一年といい、百年と言っても、悠久の時の流れから見ると実に一瞬にすぎない。けれども、その一瞬一瞬が積み重ねられて歴史は作られてゆく。

一昨年〝がんげつ遺跡〟が、瀬峰町教育委員会の事業として、文化財保護委員会や郷土研究会の方々によって発掘調査され、初めて瀬峰町古代史に解明のメスが入れられた。非常に貴重な資料も得られ、立派な報告書も作られ、考古学に対する知識の全くない私まで、大変興味深く読ませていただいた。

報告書によると、瀬峰町には、奈良・平安時代の遺跡が多く、相当広い規模の集落があったことが窺われ、その中に長者原Ⅱ遺跡も指摘されていた。

奈良・平安の時代も、日本史の中の遠い昔の一駒でしかないが、身近にそれが存在するということは、私にとって非常な親近感が生まれてくるのである。

吾々の現代のたたずまいも、未来の人々にとっては、こうしたことが繰り返されるのであろうか。

この度の発掘調査に当っては、宅地造成事業中途にして、土地立入を御快諾された地主の中野氏の御協力に対して、心から感謝と敬意の誠を捧げるものである。

今回の調査は、国費・県費の補助を受け、県文化財保護課の担当の方々には、計画から実施まで、多大の御配慮をいただいたし、町教委の職員も大変苦労されたことだろうと思う。大勢の町民の方々にも作業に従事していただいた。多額の町費も支出されたが、これ等は決して無駄ではなかったという報告書を、皆様の手にお届け出来たものと思う。

昭和54年3月

栗原郡瀬峰町長　加　藤　光　明

発刊のことば

近来東北の開発は年を追って進み、高速自動車道に続いて新幹線工事、これとタイアップして住宅地造成、工場建設等各地で開発が行われている。東北の歴史は長い間中央政府から離れていたため祖先の生活が明らかにされていなかったが、文化財、特に埋蔵文化財等の解明によって古い時代の郷土の人々の生活が少しずつではあるが明らかにされてきている。

瀬峰町教育委員会でも文化財については特に意を用い文化財保護委員会にはかり、民間の熱心な郷土研究会の協力を得て、昭和46年には「瀬峰町の史跡と伝承」をまとめ、同49年には「がんげつ遺跡」、続いて同52年に第二の「がんげつ遺跡」の調査を実施している。

この度の「長者原Ⅱ遺跡」は、中野芳夫氏所有地の林地開発、宅地造成の過程の中で昭和52年８月、パトロール指導員佐藤信行氏によって発見された。

そこで、県教育委員会の指導のもとに国、県の補助を得て発掘調査を実施することになった。

昭和53年６月５日に調査を開始した。調査員として県文化財保護課の職員、作業員として郷土研究会、地域の方々の協力を得て発掘調査にあたった。調査は、７月８日に終了した。７月１日の現地説明会には、郡内隣郡、各市町村からの参加を得て、奈良・平安期の集落遺跡について報告書の通り意義深い説明会ができた。

この度の発掘調査に当り終始指導に当られた県教育委員会の先生方と、積極的に協力頂いた地域の皆さんに衷心から敬意と感謝を表したい。このまとめが今後文化財への一層の理解を深め、遺跡保存のため更に大きく役立つことができれば幸いです。

昭 和 54 年 3 月

瀬峰町教育委員会教育長　手　島　正　夫

例　　言

1．本書は栗原郡瀬峰町藤沢字長者原地内の宅地造成計画に伴う発掘調査報告書である。

2．遺　　跡　　名：長者原Ⅱ遺跡（遺跡記号：ＥＹ、宮城県遺跡登載番号：46038 ）

3．遺 跡 所 在 地：宮城県栗原郡瀬峰町藤沢字長者原38－１

4．調 査 主 体 者：瀬峰町教育委員会

5．調 査 担 当 者：宮城県教育庁文化財保護課

　　調 査 員：高橋　守克、遊佐　五郎、真山　　悟、森　　貢喜

6．地 元 協 力 者：

　佐々木尚美、高橋　　清、小野寺松雄、佐竹　福治、鈴木清太夫、千葉　忠一、
　鎌田　芳喜、遠藤　儀昭、加藤　栄六、遠藤　吉男、二上　一男、二上　　勝、
　高橋ふみ子、山田千代子、遠藤　元子、星　とし子、高橋　澄子、大久保つか子、
　佐々木よし、佐々木波子、山田　千秋

7．整 理 協 力 者：

　興梠　知里、太田　育子、槻田　栄子、石川小夜里、佐藤　良子、西沢　　理、
　大岩　郁夫、庄子まき子、庄子すじい、庄子　貞子、庄子　友子、庄子　君代、
　佐藤カツエ、庄子サカエ、尾上　幸子、庄子　久代、明星　宣子、庄子　裕子、
　桃枝　京子

8．調　査　期　間：昭和53年６月５日～７月８日

9．調査対象面積：約6,568㎡、実 発 掘 面 積：約5,404㎡

10. 本書写真２はパシフィック航業株式会社の提供によるものである。

11. 本書において、土色については「小山・竹原：1967」を、土性については国際土壌学会法の粒径区分を参照した。

12. 本書は、宮城県教育庁文化財保護課の職員が協議のうえ、高橋守克が執筆・編集を行なった。

13. 本遺跡の調査内容に関しては、現地説明会資料（瀬峰町教育委員会：1978）で一部紹介しているが、本報告書の記載内容がそれに優先するものである。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1

Ⅱ．遺跡の位置と環境 …… 3
　1．位置と自然環境 …… 3
　2．周辺の遺跡と歴史的環境 …… 5

Ⅲ．調査の方法と経過 …… 9

Ⅳ．発見された遺構と遺物 …… 11
　1．遺跡の基本層位 …… 11
　2．竪穴住居跡とその出土遺物 …… 15
　3．土壙とその出土遺物 …… 25
　4．焼土遺構 …… 25
　5．遺構以外の出土遺物 …… 27

Ⅴ．遺構・遺物に関する考察と問題点 …… 33
　1．住居跡の構造 …… 33
　2．出土土器の分類 …… 35
　3．出土土器の年代 …… 38
　4．遺構の年代 …… 39

Ⅵ．まとめ …… 39

Ⅰ．調査にいたる経過

長者原Ⅱ遺跡は、当初は知られていなかった遺跡である。昭和52年８月、地主中野芳夫氏は宅地造成を目的にブルドーザーによる削平を行なった。この時、土師器や須恵器などの遺物が出土した。

このことについて地元識者から連絡を受けた瀬峰町教育委員会は、直ちに現場の確認を行ない、遺跡の取扱いに関する指導を宮城県教育委員会に依頼した。そこで、県教育委員会が現地調査を実施したところ、竪穴住居跡などの存在が予想されたため、まず遺跡の発見届を提出すること、遺跡の措置について関係者間で協議することなどを町教育委員会に要請した。

協議の結果、瀬峰町および町教育委員会は事前調査による記録保存をすることとし、昭和53年度の文化庁国庫補助事業としての調査計画をたてた。

昭和53年に入り、発掘調査の担当を宮城県教育庁文化財保護課に依頼し、調査を実施することになった。

写真１　発掘前の状況

第１図　遺跡内の地形（発掘前）

Ⅱ．遺跡の位置と環境

１．位置と自然環境

長者原Ⅱ遺跡は、瀬峰町藤沢字長者原38番地の１に所在する。東北本線瀬峰駅の西約750mで、瀬峰中学校のすぐ北側の地点に位置する。

遺跡の所在する瀬峰町は、宮城県の北西部・栗原郡の東南端に位置しており、東南約10km、南北約８km、面積は約30.20km²である（瀬峰町：1966）。

宮城県北西部の栗原郡一帯には、奥羽山脈から派生し、大部分が小起伏丘陵である築館丘陵が広がっている。この丘陵は、南東の方向にその高さを減じながら延びている。また、この丘陵は、迫川をはじめとする大小の河川によって複雑に開析されている。

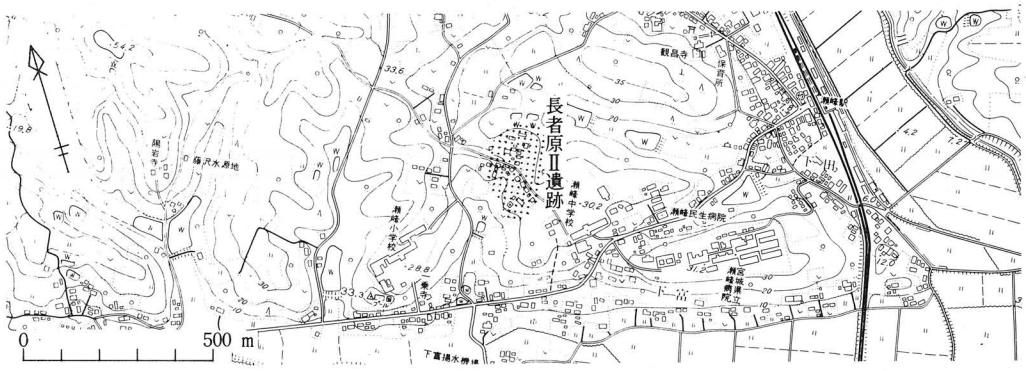
瀬峰町内の地形をみると、大きく北部・中央部・南部の三地区に分けることができる。

中央部は、岩出山町と一迫町の境付近から高清水町を経て東流し、南方町の蕪栗沼に注ぎ込む小山田川によって形成された扇状地性低地になっている。この扇状地性低地は、町の西端で標高約15m、東端では約５mというなだらかな傾斜をもって東側に広がっていき、迫川低地と呼ばれる湖沼地帯や低湿地と接している。

南部は、古川市の北部から東側に延びる標高30m前後の岩石台地が横たわっている。

北部は、築館丘陵の一部である標高50m前後の小起伏丘陵が横たわっている。この丘陵は、瀬峰町・築館町・高清水町の境付近から源を発して東流する瀬峰川によって開析され、南北に二分されている。南北の両丘陵は、大小の沢谷によってさらに開析され、複雑な微地形を形成している。その端部は樹枝状あるいは舌状になっている。

遺跡は、町北部に横たわる丘陵のうち、南側にある小起伏丘陵が南に向って舌状に張り出した丘陵上に立地している。遺跡の立地する部分は標高約33mで、現状は山林および宅地になっている。



第２図　遺跡周辺の地形

写真２　長者原Ⅱ遺跡（航空写真）

2．周辺の遺跡と歴史的環境

瀬峰町内には、現在のところ66ケ所の遺跡が発見されている（宮城県教育委員会：1976、1978－a）。これらの遺跡を通して、長者原Ⅱ遺跡が形成された歴史的背景やそれ以後の歴史について概観してみたい。

現在のところ、町内からは旧石器時代にさかのぼる遺跡は発見されていない。したがって、瀬峰町の歴史は次の縄文時代からたどることができる。

縄文時代は、今から約10,000～2,000年前の時代である。石器や骨角器などの道具を使って、シカ・イノシシなどの獣類や鳥類、さらには魚貝類を捕獲したり、植物の実などを採集し、これらを食料として生活していた。

縄文時代の遺跡は、7ケ所確認されている。これらの遺跡は、いずれも北部の小起伏丘陵上や南部の岩石台地上で発見されている。町内最古の遺跡は、空堤遺跡で、縄文時代前期の土器などが出土している。前期・中期の遺跡としては、岩石遺跡、後期の遺跡としては、大鰐谷北向遺跡がある。その他、時期は不明であるが、的場山遺跡・坂ノ下浦遺跡・諏訪神社遺跡・鼻欠遺跡からは、縄文土器をはじめ石鏃・石匙・石斧などの石器が発見されている。

縄文時代に続く弥生文化が、紀元前後になって西日本から東日本にも伝播し、定着する。弥生時代には、これまでの狩猟・採集などの生活から水稲栽培を実施する生活に変化する。また、金属器も使用されるようになった。

現在のところ、町内からは弥生時代の遺跡は発見されていないが、大鰐谷地内からこの時代に伴うと考えられているアメリカ式石鏃が発見されている（瀬峰町教育委員会：1977）。

弥生時代には、金属器の普及に伴う農耕具などの発達により、水稲栽培を軸とした農耕もその生産力を増大させていった。この生産力の増大に伴って、共同体の中に階級の分化が生まれてきた。こうした階級分化によって支配者層が出現し、彼らの墓としての古墳が築造されるようになった。この時代を古墳時代という。

町内の古墳には、王壇古墳・四ツ壇古墳群・杉ノ壇古墳・瀬峰西古墳群・八幡前古墳群・長者原古墳群などがある。いずれも古墳時代後期に属するものと考えられている。しかし、これらの古墳を築造した支配者層を支えたであろう人々が居住した集落跡については現在のところ不明であるが、泉谷遺跡・上荒町遺跡（瀬峰町教育委員会：1977）などはその可能性がある。

奈良・平安時代になると、この地域も律令制度にもとづく政治体制に組み入れられるようになる。すなわち、これまでの在地の支配者層に変って、国家の直接的な支配を受けることになった。

この時代の官衙や寺院の建物には、屋根が瓦で葺かれるものもある。神田遺跡からは、平瓦片や重弧文軒平瓦片（多賀城第Ⅰ期）が出土しており、窯跡の可能性も考えられている（瀬峰

町教育委員会：1977)。また、この時代の集落跡と考えられる遺跡は非常に多い。本遺跡の周辺では、長者原遺跡・一本松遺跡・清水山遺跡・大境山遺跡・がんげつ遺跡などがある。がんげつ遺跡からは、昭和50年の調査で平安時代の竪穴住居跡が発見されている（瀬峰町教育委員会：1977)。

また、本町の南で隣接する田尻町の小松・八幡・大嶺一帯を新田柵跡に擬定する説（興野：1960）もあり、それを受けて「和名抄」に出てくる新田郡内の仲村郷を瀬峰町南部の旧中村地区と考える説もある（栗原郡藤里村誌編纂委員会：1922、瀬峰町教育委員会：1977)。

中世から近世になると、土豪的武士層によって城館が築造された。丘陵や台地上に立地し、土塁や堀を巡らしているのが一般的である。このような城館跡としては、桝形館跡・伊勢堂館跡・藤沢館跡・殿上館跡・館山館跡など多数知られている。しかし、この時代の集落などの遺跡は現在のところ未発見である。ただ、高清水町観音沢遺跡では、中世の集落跡と考えられる遺構（宮城県教育委員会：1977)、築館町熊刈地区からは中世の陶器を生産した窯跡が発見されている（藤沼：1977)。また、大鰐谷の経壇遺跡は経塚と考えられるが、古代・中世のどちらの時期かは不明である。

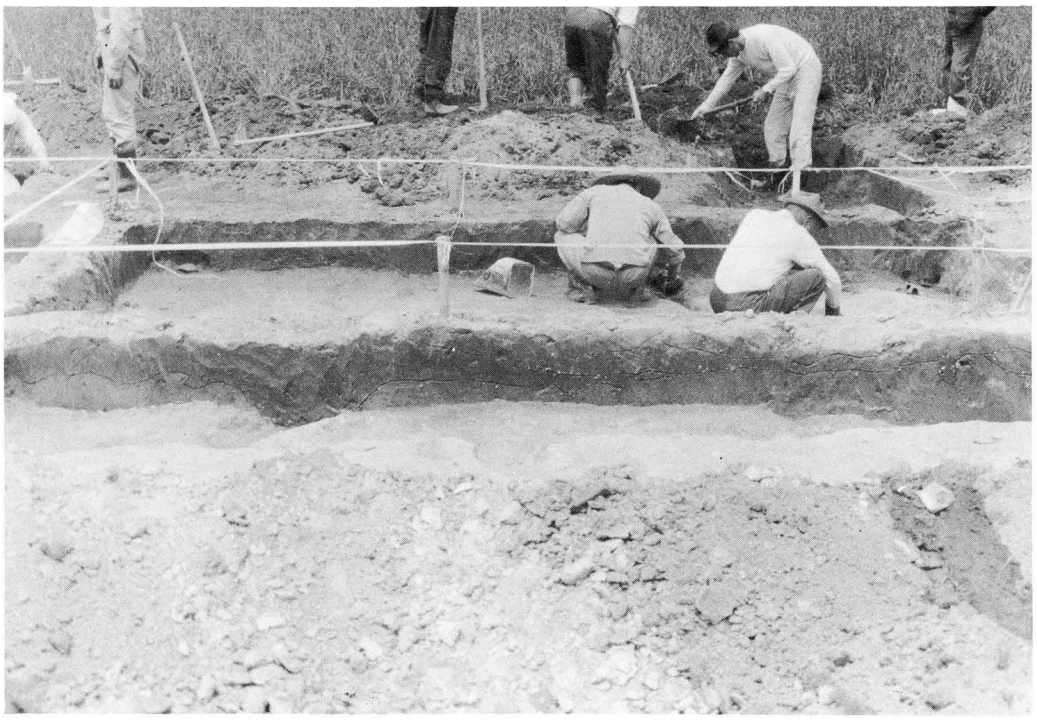
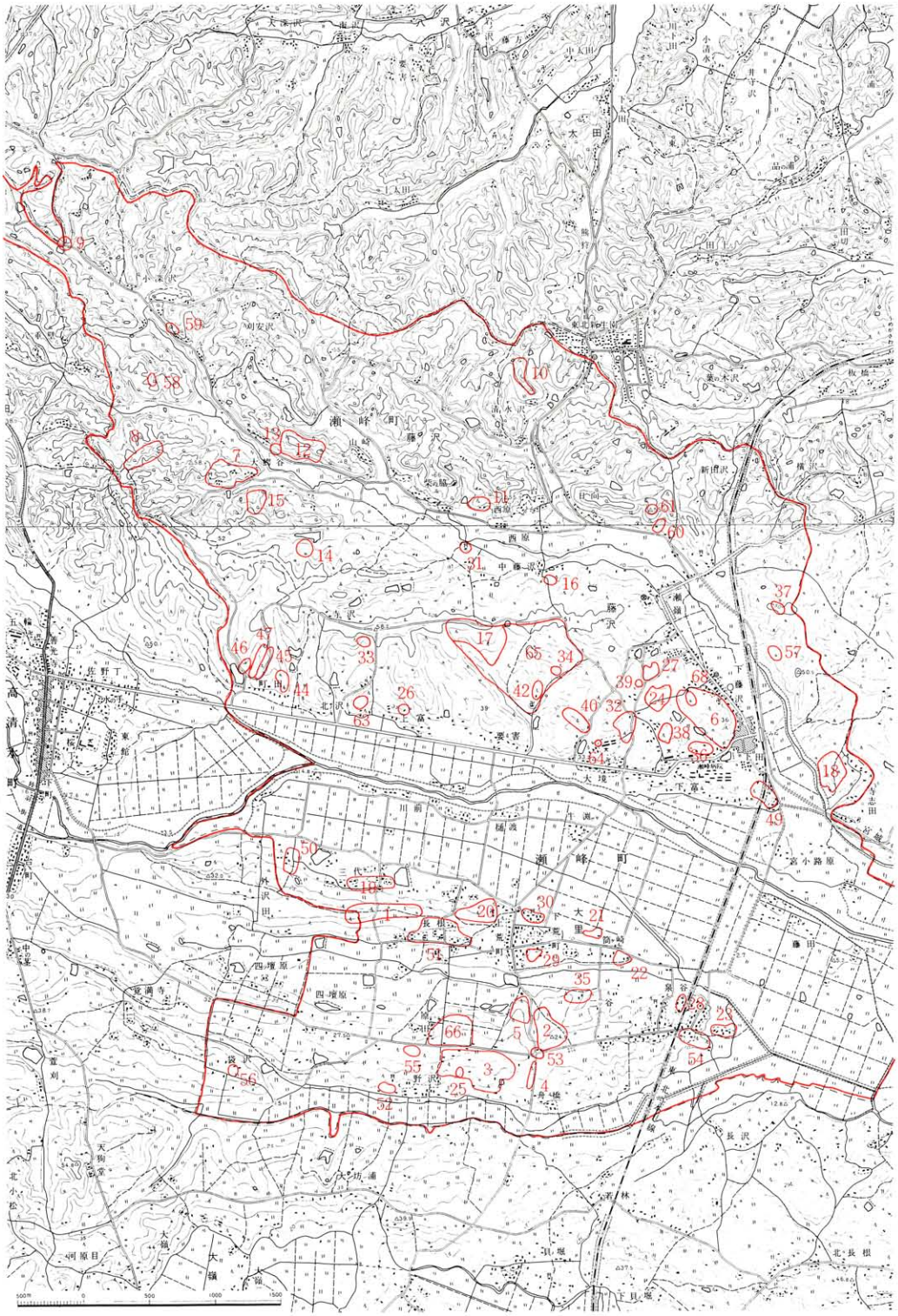


写真３　がんげつ遺跡調査風景



第３図　瀬峰町内遺跡分布図

第1表　瀬峰町の遺跡

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	王壇古墳	台地	古墳	古墳（後）	35	二ツ谷遺跡	丘陵端	住居跡	奈良・平安
2	四ツ壇古墳	〃	包含地古墳	古墳（後）奈良平安	36	民生病院裏遺跡	〃	集落跡	平安
3	桝形館跡	〃	包含地城館	奈良・平安・中世	37	八幡前古墳群	丘陵頂	古墳群	飛鳥・奈良・平安
4	四ツ塚遺跡	〃	塚	平安	**38**	**長者原Ⅱ遺跡**	**丘陵**	**集落跡**	**奈良・平安**
5	伊勢堂館跡	〃	包含地城館	縄文・奈良・平安・中世	39	一本松遺跡	〃	散布地	〃
6	藤沢館跡	〃	城館	中世・近世	40	大境山遺跡	〃	集落跡	奈良末
7	殿上館跡	丘陵	〃	中世	41	がんげつN遺跡	〃	〃	奈良・平安
8	経壇遺跡	〃	経塚	古代？	42	坂ノ下浦Ⅱ遺跡	〃	散布地	〃
9	小深沢殿上館跡	〃	城館	中世（鎌倉）	43	寺浦遺跡		〃	〃
10	館山館跡	〃	包含地城館		44	町田遺跡	〃	〃	〃
11	的場山館跡	〃	包含地	縄文・奈良・平安	45	薬沢東Ⅰ遺跡	〃	〃	平安
12	古館館跡	〃	城館	中世	46	薬沢東Ⅱ遺跡	〃	〃	〃
13	大鰐谷北向遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（後）	47	薬沢東Ⅲ遺跡	〃		
14	空堤遺跡	〃	〃	縄文（前）	48	下富前遺跡	〃		
15	寺山（極楽寺跡）	〃	寺院跡	平安	49	伯耆ケ崎遺跡	〃		縄文・奈良・平安
16	砂田遺跡	台地	包含地	奈良・平安	50	中三代遺跡	台地		奈良・平安
17	岩石遺跡	丘陵	集落跡	縄文（前・中）古墳・奈良・平安	51	長根遺跡	〃		〃
18	下山遺跡	台地	包含地	奈良・平安	52	諏訪神社遺跡	〃		縄文・奈良・平安
19	三代遺跡	〃	〃	〃	53	諏訪原経塚遺跡	〃		近世
20	長根遺跡	〃	〃	〃	54	鼻欠遺跡	〃		縄文
21	荒町遺跡	〃	〃		55	野沢遺跡	〃		
22	筒ケ崎遺跡	〃	〃		56	袋沢遺跡	〃		奈良・平安
23	泉谷遺跡	〃	〃	古代	57	五輪堂山遺跡	丘陵		平安
24	長者原遺跡	〃	〃	奈良・平安	58	小深沢遺跡	〃		
25	無縁塚	〃	塚		59	小深沢Ⅱ遺跡	〃		奈良・平安
26	杉ノ壇古墳	〃	〃	古墳	60	横森遺跡	〃		
27	瀬峰西古墳群	〃	古墳	〃	61	ホイト塚遺跡	〃		
28	泉谷館跡	〃	城館	中世	62	欠番			
29	除館跡	〃	〃	〃	63	北ノ沢遺跡	丘陵		奈良・平安
30	旗塚	〃	塚		64	小学校内古墳？	〃		
31	古塚	〃	〃		65	上富丘陵東部遺跡群	〃		
32	清水山遺跡	丘陵中腹	集落跡	奈良・平安	66	神田遺跡	台地		
33	薬沢遺跡	丘陵斜面	住居跡	平安	67	欠番			
34	坂ノ下浦遺跡	丘陵端	集落跡	縄文・平安	6	長者原古墳群	丘陵		

Ⅲ．調査の方法と経過

発掘調査に先立ち、遺跡とくに発掘調査対象地区を中心に1/500の地形測量図を作成した。また、その範囲の踏査も実施した。その結果、発掘調査対象地区は、南東から北西にかけて地山まで削平されており、その削平された土は北および南西の谷状になった部分に盛土されていた。

発掘調査は昭和53年６月５日に始まった。まず、調査対象地区内に、地形測量の際に原点としたＴ-4とＴ-5を結ぶ南北の基準線を設定した。次いで、Ｔ-4を通って南北の基準線に直交する東西の基準線を設定した。この両基準線をもとにして全体に３ｍ方眼のグリッドを設定した。グリッド名は、Ｔ-4の南側を20区、北側を21区、西側をＨ区、東側をＩ区とし、それをそれぞれ延長して付した。

発掘調査は、南東から北西にかけて削平された部分は遺構の確認を、盛土された部分は盛土を排除することから実施することにした。

６月14日頃までに、南東から北西にかけての削平された部分から、竪穴住居跡４軒、焼土遺構１基、土壙１基などの遺構が発見された。また、南西部の盛土の部分は、厚いところで約1．５ｍ盛土されており、その盛土は一度地山まで削った後に盛られていることが判明した。

６月14・15日には、発見された遺構の部分に遣り方を設定し、精査を開始した。遺構はすべて宅地造成時に削平を受けており、保存状況は良好ではなかった。

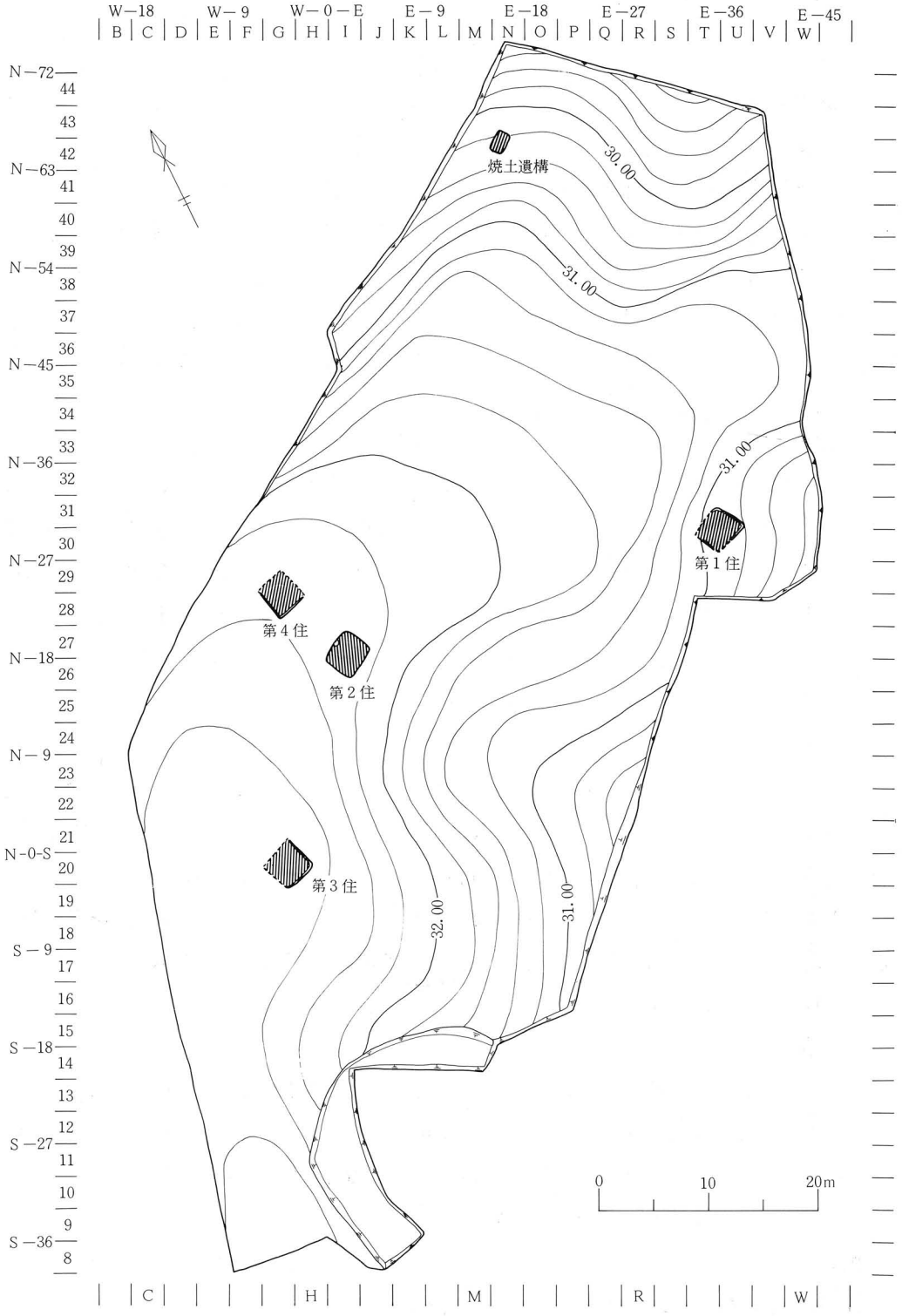
６月29日には、遺構の精査を完了した。６月30日には、発掘調査区域のレベリングを実施した。

７月１日には、調査の経過と成果を公開するために、地元瀬峰町の町民を対象として現地説明会を開催した。

その後、各遺構の補足調査や写真撮影などを行ない、７月８日に発掘調査を終了した。

調査の記録には、日誌・図面・写真などがある。図面には平面図と断面図とがある。各遺構の平面図は1/20で、遺構配置図・発掘区の地形図は1/200で作成した。各遺構の断面図および遺跡の層序などを記録した断面図はすべて1/20で作成した。写真は、白黒写真については４×５、35㎜で、カラー写真についてはスライド用として35㎜のカメラを使用して撮影した。

なお、発掘調査終了後に重機等によって発掘調査区内の埋め戻し作業を実施し、発掘調査以前の状況―宅地造成された状態―に復した。


W−18
W−9
W−0−E
E−9
E−18
E−27
E−36
E−45
B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W
N−72
N−63
N−54
N−45
N−36
N−27
N−18
N−9
N-0-S
S−9
S−18
S−27
S−36
44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8
焼土遺構
30.00
31.00
31.00
第1住
第4住
第2住
第3住
32.00
31.00
0
10
20m
C
H
M
R
W

第4図　遺構配置図

Ⅳ．発見された遺構と遺物

1．遺跡の基本層位

遺跡は丘陵の尾根上にあたる平坦部およびその周囲の斜面に立地している。今回の発掘調査区の微地形をみると、次のようになっている。平坦部は調査区の西端に沿って北東の方向に延びており、調査区の北東部で向きを変え、東側に延びていく。そのため、調査区の北および南東の部分は斜面となっている。しかしながら、調査区の大部分は造成時に削平を受けており、ことに調査区西側の平坦部のところが著しい。この削平された土は、斜面上に盛られていた。

盛土を含めて地山までの堆積層が、基本的に３層認められた。上部から第Ⅰ～第Ⅲ層と名付けた。以下、堆積層の状況や分布などについて述べる。

〈第Ⅰ層〉

第Ⅰ層は明黄褐色（10ＹＲ6/8）シルトに黒褐色（10ＹＲ3/2）シルトを含む層である。層の状況やその堆積状態などから、人為的に移動させられて堆積している層である。平坦部では、部分的に認められ、層の厚さは数cmと薄い。北側の斜面では、平均して約40cmの厚さをもつ。南東部の斜面では、平坦部と傾斜の変換するところでは薄いが、東に行くにつれて厚さを増し、最も厚いところでは約1.5mである。出土遺物としては土師器・須恵器の破片などがあり、その数は比較的多い。遺物は第Ⅰ層として取り上げた。

〈第Ⅱ層〉

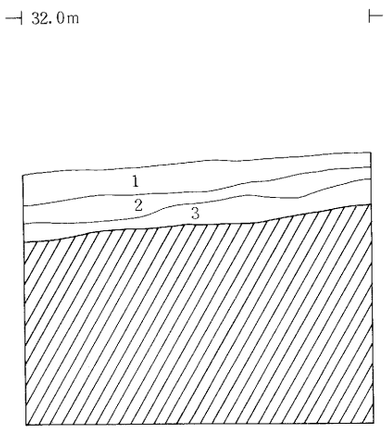
第Ⅱ層は黒褐色（10ＹＲ 3/2）シルト層である。この層が調査区外においては、現在の表土となっている。調査区内は造成時において、大部分が地山まで削平されているため、第Ⅱ層はほんの一部のところにしか残っていない。北側斜面では、東部のわずかに谷状になっているところに認められ、残存する層の厚さは10～20cmである。南東部斜面では、第２住居跡と第３住居跡を結ぶ付近で、平坦部から斜面への傾斜変換する部分からわずかに斜面に移行したところに認められる。層の厚さは約10cmである。出土遺物は全くない。

〈第Ⅲ層〉

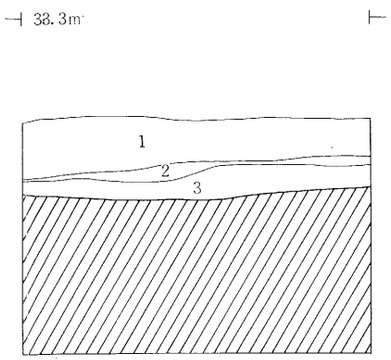
第Ⅲ層は暗褐色(10ＹＲ 3/4)砂質シルト層である。この層の分布するところは第Ⅱ層のそれとほぼ同一である。しかし、第Ⅱ層よりは造成時の削平を受けていないところから、分布する範囲は第Ⅱ層の範囲よりも広い。層の厚さは15～20cmでほぼ一定している。遺物としては土師器片などが出土しているが、その数は少ない。

〈地山〉

明黄褐色（10ＹＲ 6/8）シルトからなる。遺構はすべてこの層の上面で検出された。



〔R－40区〕



〔N－26区〕

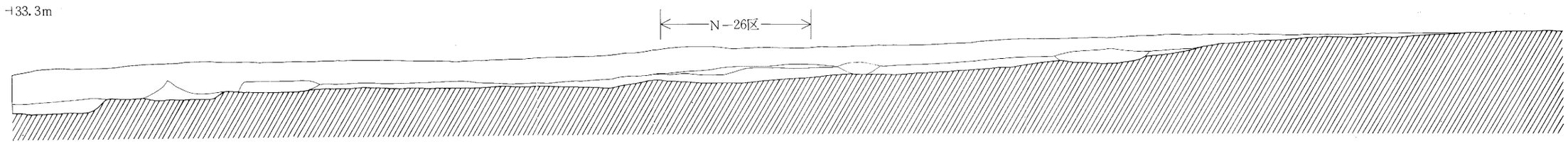
〔Ⅰ～S－26区〕

層　位	層 No.	土　　色	土　　性	備　　考
第Ⅰ層	1	明黄褐色（10YR 6/8）	シ　ル　ト	黒褐色（10YR 3/2）シルトを少量含む。
第Ⅱ層	2	黒 褐 色（10YR 3/2）	シ　ル　ト	木根が入る。
第Ⅲ層	3	暗 褐 色（10YR 3/4）	砂質シルト	

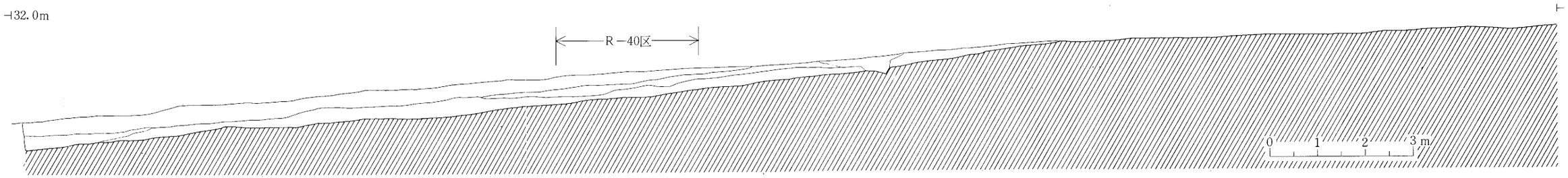
〔R－34～44区〕

層　位	層 No.	土　　色	土　　性	備　　考
第Ⅰ層	1	明黄褐色（10YR 6/8）	シ　ル　ト	黒褐色（10YR 3/2）シルトを少量含む。
第Ⅱ層	2	黒 褐 色（10YR 3/2）	シ　ル　ト	
第Ⅲ層	3	暗 褐 色（10YR 3/4）	砂質シルト	

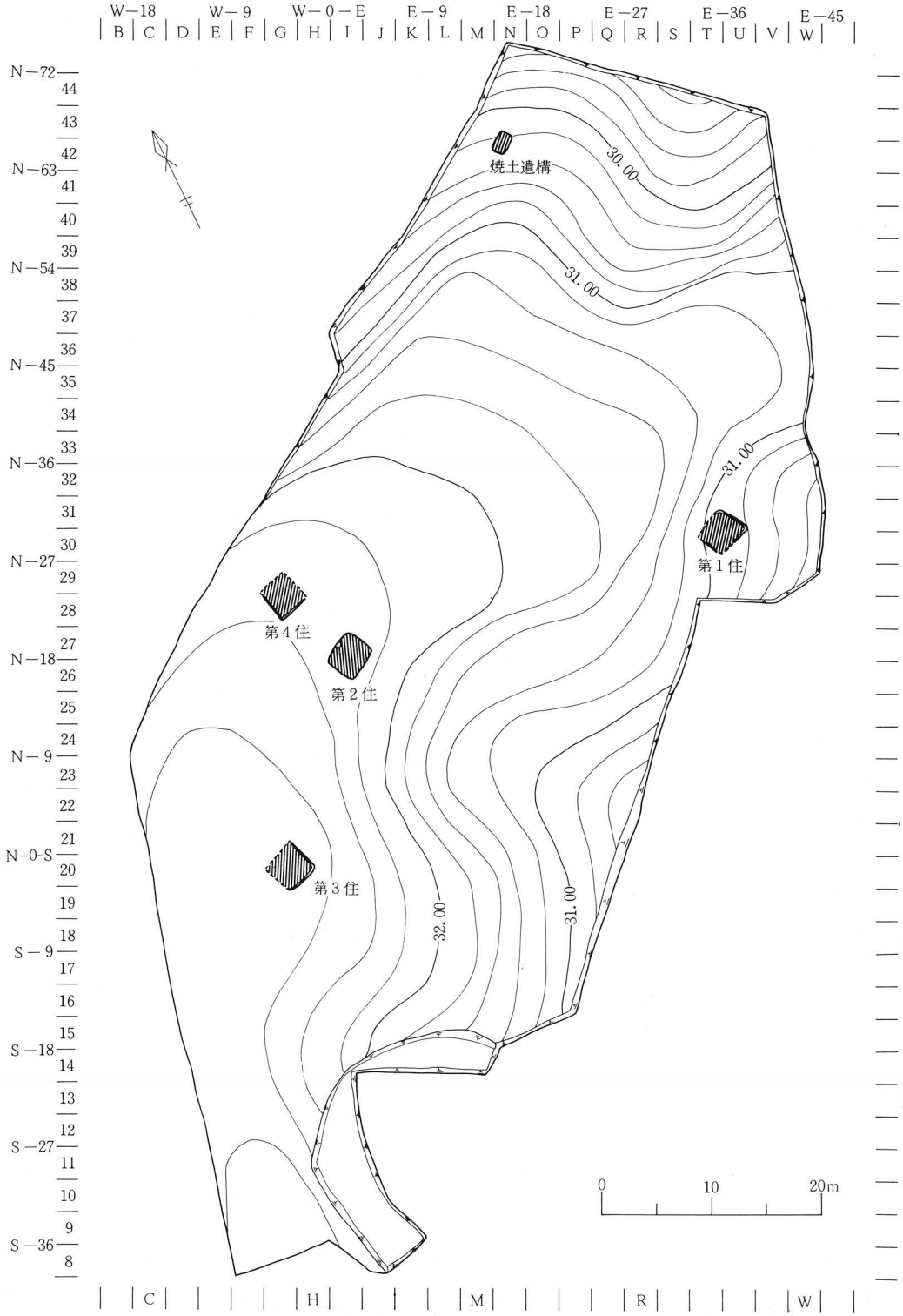
〔Ⅰ～S－26区断面図〕



〔R－34～44区断面図〕



第5図　遺跡の基本層位


W−18
W−9
W−0−E
E−9
E−18
E−27
E−36
E−45
B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W
N−72
N−63
N−54
N−45
N−36
N−27
N−18
N−9
N-0-S
S−9
S−18
S−27
S−36
44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8
焼土遺構
30.00
31.00
31.00
32.00
31.00
第1住
第2住
第3住
第4住
0
10
20m
C H M R W

第6図　遺構配置図

2．竪穴住居跡とその出土遺物

〔第１住居跡〕

遺構の確認：発掘区の北東部、Ｔ・Ｕ－30・31区の地山面で確認された。

重複：他の遺構との重複関係は認められない。

平面形・規模：住居全体が造成時に削平を受けており、とくに南東隅・南西隅が著しい。平面形は方形で、軸長は約3.6mである。推定される住居内面積は、約13㎡である。

堆積土：２層認められた。第１層は暗褐色(10ＹＲ 3/4)シルト層であり、住居跡北側部分の床面上に堆積している。第２層は暗褐色(10ＹＲ 3/4)シルトに灰黄褐色(10ＹＲ 6/2)シルトを混入する層であり、壁沿いおよび周溝内に堆積している。

壁：削平を受けているため、北東隅を除き壁は残存していない。北東隅では、地山を壁としており、残存壁高は最も良好な部分で約８cmである。

床面：住居跡北側の堆積土の残っていた部分にのみ認められた。他は削平のために明確な面をとらえることができなかった。残存する床面は、東西約1.5m、南北約2.1mの範囲で、その面積は約３㎡である。なお、床面の検出された部分では地山を床としており、貼床等は認められない。また、残存する床面のほぼ中央で40cm×20cmの範囲で焼面が確認された。

周溝：完全に残っているのは東辺だけである。南辺と北辺は、東辺から続いておりその残存する長さはそれぞれ約２ｍと約0.8mである。西辺は約1.6mしか残っていない。残存する周溝は、幅が上端で約20cm、底面で約10cmであり、床面からの深さが約６cm、断面形は「U」字形である。

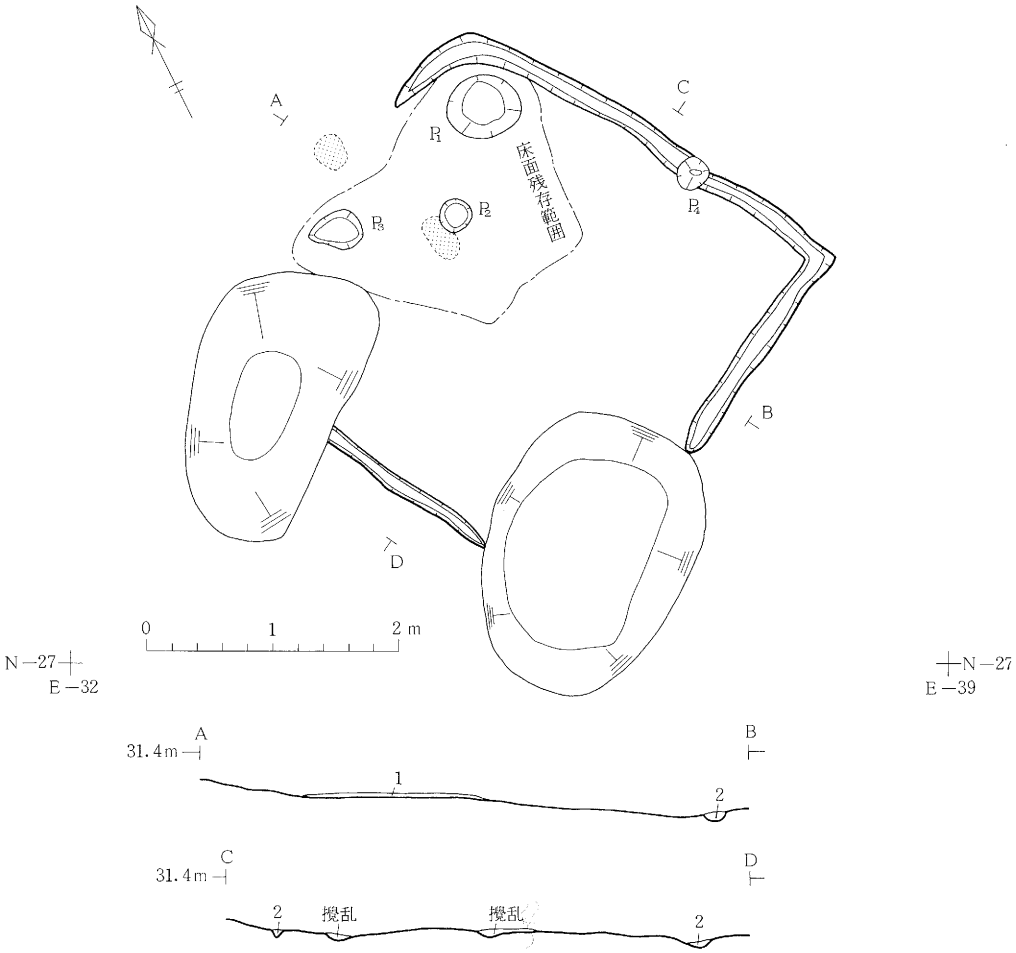
柱穴：住居跡の範囲内から検出されたピットは４個である。いずれも柱痕跡が認められず、ピットの配置にも規則性が認められない。したがって、本住居跡に伴う柱穴については不明である。

カマド：床面上で検出された焼面の他に、北辺の周溝のほぼ延長線上に焼面が認められた。焼面の範囲は約35cm×25cmである。この焼面は、位置関係から考えて本住居跡のカマド燃焼部底面の可能性がある。

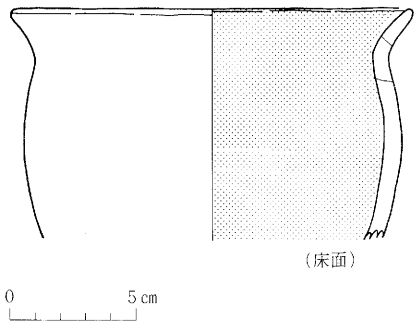
出土遺物：床面・周溝・ピット・堆積土などから土師器が出土している。

〔**床面**〕（第７図、第２表）

復元可能な甕が出土している（第７図)。Ｔ－30区第Ⅰ層、Ｐ－31区第Ⅰ層出土の破片と接合された。小形の甕である。体部下半・底部を欠いている。口縁径は約16cmである。器高は約9.3cmしか残っていない。頸部はゆるく外反し、口縁部は外傾し短い。口縁端部は丸味をもっている。体部は上部でやや丸味をもち、そのまま底部に至るものと思われる。器面調整については、内外面とも磨滅しており不明の部分も多いが、内面は黒色処理されている。



層位	層No.	土色	土性	備考
第1層	1	暗褐色(10YR 3/4)	シルト	
第2層	2	暗褐色(10YR 3/4)	シルト	灰黄褐色(10YR 6/2)シルトを混入



Pit No.	P1	P2	P3	P4
深さ(cm)	15	20	9	8
土色	暗褐色(10YR 3/4)	暗褐色(10YR 3/4)	暗褐色(10YR 3/4)	暗褐色(10YR 3/4)
土性	シルト	シルト	シルト	シルト
備考		木炭・焼土を多量に混入	木炭・焼土を多量に混入	

第7図　第1住居跡

その他、土師器甕の破片が7点出土している。

〔周溝・ピット〕（第2表）

いずれも遺構の底面から出土した土師器甕の破片である。内外面とも磨滅しており、器面調整の不明なものが多い。

〔堆積土〕（第2表）

土師器甕の破片が出土している。いずれも磨滅のため、器面調整は不明である。

第2表　第1住居跡出土土器破片

			技　法	堆積土1層	床　面	周　溝	P_1	P_2	P_3	計
土師器	甕	口縁部	ヨコナデ―不　明			1				1
			不　明―不　明		1					1
			不　明―ヨコナデ						1	1
		体部	ケズリ―不　明		2	1		1		4
			不　明―不　明	3	4	24	3	2	1	37
計				3	7	26	3	3	2	44

〔第2住居跡〕

遺構の確認：発掘区のほぼ中央、I・J―26・27区の地山面で確認された。

重複：住居跡の東側の部分でピットと重複している。このピットは、住居跡の堆積面や床面を掘り込んでいるので、本住居よりも新しい。

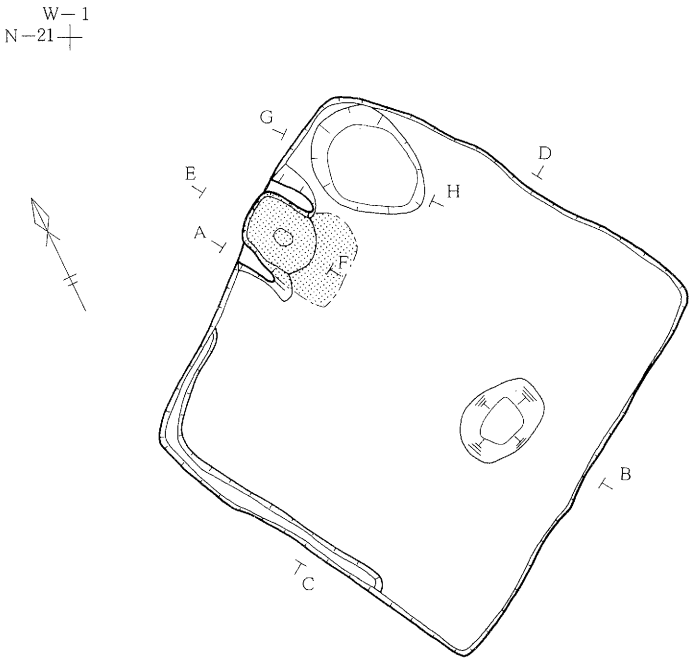
平面形・規模：平面形は方形で、軸長は約3.4mである。住居内の面積は約11.6㎡である。

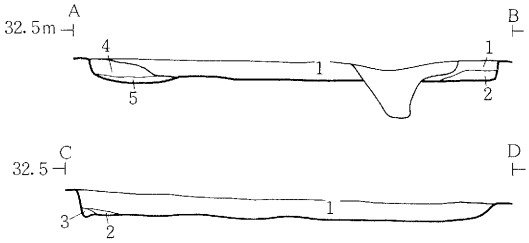
堆積土：3層認められた。第1層は黒褐色(10YR 2/3)シルトに地山ブロックを多く含む層である。住居跡全体を覆い、住居跡中央部では床面上に堆積している。第2層はにぶい黄橙色(10YR 7/4)シルトににぶい黄褐色(10YR 4/3)シルトをブロック状に含む層である。北・南・西壁沿いに堆積している。第3層は暗褐色(10YR 3/4)シルトにわずかに地山粒子を含む層である。北壁・西壁沿いおよび周溝内に堆積している。なお、第1層・第2層とも層に多量の地山ブロックを含んでおり、人為的に埋められた可能性もある。

壁：地山を壁としている。東辺ではややゆるやかであるが、他はほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は12～18cmである。

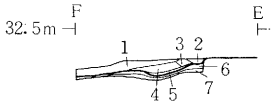
床面：地山を床としている。東辺とカマド周辺がやや高いが、全体としてはほぼ平坦である。また、床面はかたくしまっている。

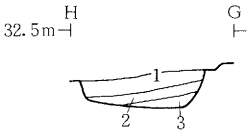
周溝：北辺の南半と西辺の約2/3の北側の壁沿いを「L」字状にめぐっている。幅は、上端





層　位	層No.	土　　色	土　性	備　　考
第 1 層	1	黒　褐　色(10YR 3/2)	シルト	地山ブロックを多く含む
第 2 層	2	にぶい黄橙色(10YR 7/4)	シルト	にぶい黄褐色(10YR 5/3)シルトを少し含む
第 3 層	3	暗　褐　色(10YR 3/4)	シルト	わずかに地山粒子を含む
カマド側壁	4	にぶい黄橙色(10YR 7/4)	シルト	黒褐色(10YR 3/1)シルトをブロック状に含む
カマド側壁	5	暗　褐　色(10YR 3/4)	シルト	地山ブロックを含む





層　位	層No.	土　　色	土　性	備　　考
第1層	1	黒 褐 色(10YR 3/2)	シルト	部分的にカマド崩壊土を含む
第2層	2	明黄褐色(10YR 7/6)	サンデーシルト	カマド崩壊土
第3層	3	赤 褐 色(2.5YR 4/4)	サンデーシルト	カマド崩壊土，焼けている
第4層	4	暗 褐 色(7.5YR 3/4)	シルト	焼土を含む
第5層	5	赤 褐 色(5 YR 4/6)	シルト	
地　山	6	明赤褐色(5 YR 5/6)	シルト	カマド底面下の火熱の及んだ部分
地　山	7	明 褐 色(7.5YR 5/6)	シルト	〃

層　位	層No.	土　　色	土　性	備　　考
第1層	1	明 黄 褐 色(10YR 7/6)	シルト	褐色(10YR 4/4)シルトを含む，焼土・木炭を少量含む
第2層	2	にぶい黄褐色(10YR 5/4)	シルト	焼土・木炭が多量に含む
第3層	3	にぶい黄褐色(10YR 5/4)	シルト	焼土・木炭と地山ブロックを含む

第8図　第 2 住 居 跡

で約18cm、底面で約８cm、床面からの深さは４～７cmである。断面形は「U」字形である。

柱穴：住居跡内からはピットが全く検出されなかったため、柱穴については不明である。

カマド：カマドは北辺中央部からやや東側に寄ったところにとりつけられている。煙道や煙出し部は、削平のため残存していない。カマドの側壁は、人為的な造り付けによって構築されている。左側壁は長さ約50cm、幅約20cm、高さ約12cm、右側壁は長さ約44cm、幅約24cm、高さ約10cm残っている。燃焼部の左右の側壁に囲まれた部分は奥行約75cm、幅約46cmである。底面は皿状にくぼんでおり、床面からの深さは約５cmである。カマド燃焼部の構築方法は次のとおりである。最初に側壁の部分まで含む掘り方を掘る。次に、その掘り方に側壁の部分には暗褐色(10ＹＲ 3/4)シルトに、わずかに地山粒子を含む土をほぼ床面と同レベルに埋める。最後に、にぶい黄橙色(10ＹＲ 7/4)シルトに暗褐色(10ＹＲ 3/4)シルトをブロック状に含む土をその上に積んで側壁としている。天井部は残存していないが、天井部の崩落と考えられる土がカマド内に堆積していた。

カマド燃焼部の底面および奥壁・側壁の内側は火熱を受けて赤変している。なお、その焼面は、燃焼部手前の床面の部分まで及んでいる。

貯蔵穴状ピット：北東隅に認められた。長軸約 104cm、短軸約80cmの楕円形のピットで、床面からの深さは北側で約30cm、南側で約20cmである。堆積土は３層認められた。堆積土には、焼土・木炭が含まれている。

出土遺物：床面・貯蔵穴・堆積土から土師器と須恵器が出土している。

〔**床面**〕（第９図１）

土師器坏が出土している。体部が少し破損しているが、ほぼ完形の土器である。口縁部径約14cm、底部径約９cm、高さ約３cmである。底部はやや丸味をもつ平底である。体部外面の下部には段がめぐっている。段から口縁部まで外傾している。内外面とも磨滅しているが、部分的に器面調整が観察される。それによると、外面は段から上の体部および口縁部がヘラミガキ、段から下の体部および底面がヘラケズリされている。段から下の体部および底部は、ヘラケズリの後にミガキのような調整を受けているようにも見えるが判然としない。内面は、ヘラミガキされ、黒色処理されている。

〔**貯蔵穴状ピット**〕（第９図２、第３表）

土師器甕は底面のやや上から出土している。体部上半の破片を欠いているため、口縁部と体部下半・底部とは接合できないが、同一個体と思われる。頸部はゆるく屈曲し、口縁部は外反し短い。口縁端部は丸味をもつ。体部下半は外傾している。内外面とも磨滅が著しく、器面調整については全く不明である。

その他、磨滅しているが、須恵器（？）坏と思われる底部破片が１点出土している。底部外

面は、回転ヘラケズリ再調整を受けているため、切り離し技法については不明である。内面は剝落しており、器面調整等は不明である。

〔**堆積土**〕（第９図３、第３表）

土師器甕が第１層から出土している。体部下半以下を欠損している。体部はほとんど丸味をもたない。頸部で屈曲し、外傾する口縁部につづく。器面調整は磨滅が著しく内外面ともほとんど不明である。口縁部内面にヨコナデがわずかに認められる。

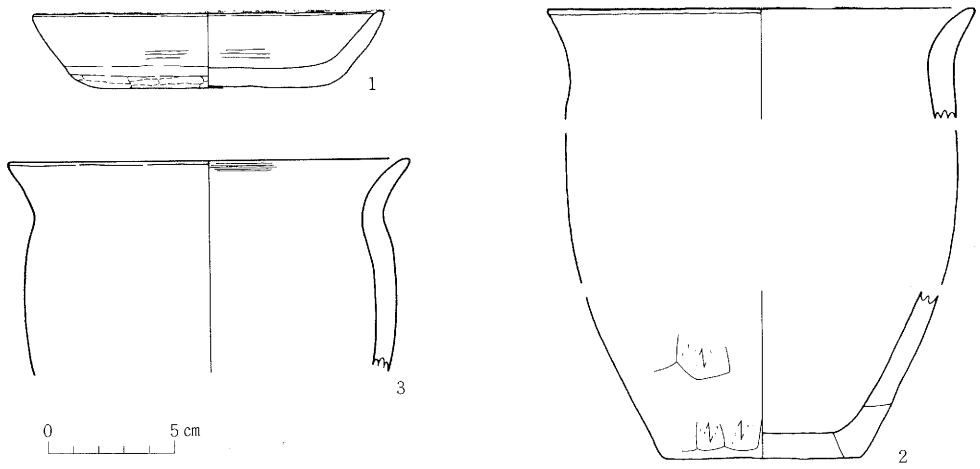
他は、すべて破片であり、計21点出土している。土師器坏の破片は、製作に際し、ロクロを使用していないものである。外面の器面調整は不明であるが、内面はヘラミガキされ、黒色処理されている。

土師器甕には口縁部破片と体部破片とがある。口縁部破片では内外面ヨコナデのものと、外面は不明である。

須恵器破片は、すべて高台付坏の高台部分かと思われる破片である。

第3表　第２住居跡出土土器破片

			技　　法	堆積土１層	貯　蔵　穴	計
土師器	坏	体部	不　明—ミガキ(内黒)	1		1
	甕	口縁部	(口)不明—ヨコナデ　(体)不明—不明	1		1
			(口)ヨコナデ—ヨコナデ　(体)ケズリ—不明	1		1
		体部	不　明—不　明	15		15
須恵器	坏	底部	不　明(回転ヘラケズリ)		1	1
	高台付坏	高坏		3		3
計				21	1	22



第９図　第２住居跡出土遺物

〔第３住居跡〕

遺構の確認：発掘区の南側、Ｇ・Ｈ－19・20・21区の地山面で確認された。

重複：土壙と重複関係にある。土壙が本住居跡の周溝堆積土を切って掘り込まれていることから、土壙が本住居跡よりも新しい。

平面形・規模：本住居跡全体が造成時の削平を受けているが、東辺と南辺に残存する周溝により、方形を基調とした平面形と推定される。規模は、東西約2.8m以上、南北約3.1m以上のものが考えられる。

堆積土：残存する周溝内にだけ認められた。暗褐色（10ＹＲ 3/3）シルトである。

壁：削平のため、全く残っていない。

周溝：東辺と南辺にだけ認められた。東辺約3.1m、南辺約2.8mの長さで残っている。幅が上端で約14cm、底面で約５cm、深さが４～８cm、断面形が「Ｕ」字形である。

柱穴：住居跡の範囲内と考えられるところから、５個のピットが検出された。そのうちピット３には柱痕跡が認められた。しかしながら、５個のピットには、ピットの大きさ、堆積土、配置などに共通性や規則性が認められない。したがって、本住居跡の柱穴については不明である。

カマド：削平のため不明である。

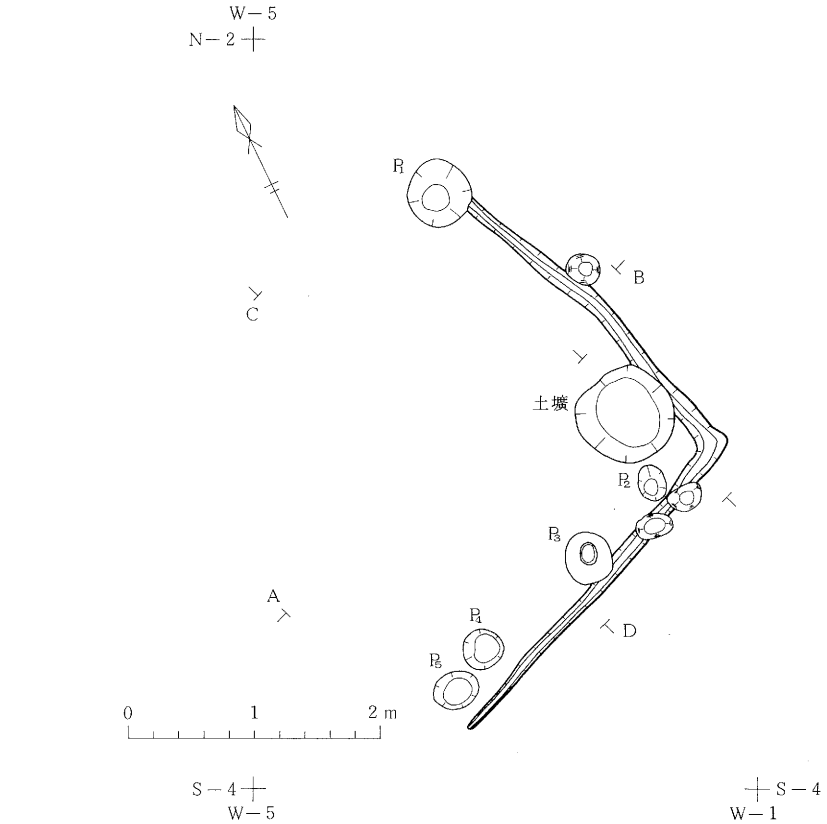
出土遺物：２個のピットから土師器甕の破片が出土している。

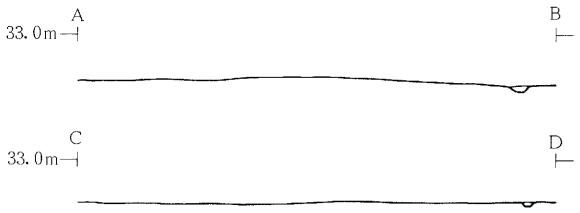
〔ピット１・２〕（第４表）

いずれも土師器甕の破片で、ピットの堆積土中から出土している。ピット１から出土した破片は、外面が平行のタタキ目のあとヘラケズリされているが内面の器面調整は不明である。ピット２から出土したものは、外面がヘラケズリ、内面がナデ調整されている。

第4表　第３住居跡出土土器破片

			技　　法	P_1	P_2	計
土師器	甕	体部	タタキ、ケズリー不明	1		1
			ケズリーナデ		1	1
計				1	1	2





層位	層No.	土　　色	土　性	備考
周溝	1	暗褐色(10YR 3/3)	シルト	

Pit No.	P1	P2	P3(掘り方)	P3(柱痕跡)	P4	P5
深さ(cm)	14	5	20	20	13	5
土　色	暗褐色(10YR 3/4)	暗褐色(10YR 3/3)	褐　色(10YR 4/4)	暗褐色(10YR 3/4)	暗褐色(10YR 3/3)	暗褐色(10YR 3/3)
土　性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
備　考	焼土・木炭を含む		地山ブロックを含む		地山ブロックを含む	地山ブロックを含む

第10図　第 3 住居跡

〔第４住居跡〕

遺構の確認：発掘区のほぼ中央、Ｇ・Ｈ－28・29区の地山面で確認された。第２住居跡のすぐ北東に位置する。

重複：新しいピットにより住居跡の周溝や床面などが切られている。

平面形・規模：住居跡全体が造成時に削平を受けているが、残存する周溝により、方形を基調とした平面形と推定される。東西約2.6ｍ以上、南北約2.4ｍ以上の規模をもつものと考えられる。

堆積土：２層認められた。第１層は暗褐色（10YR 3/4）シルトに木炭を若干含む層であり床面上に堆積している。第２層は暗褐色（10YR 3/3）シルトに地山粒子と木炭を含む層であり、壁沿いおよび周溝内に堆積している。

壁：南辺と西辺の部分でわずかに認められる。地山を壁としており、残存壁高は約２㎝である。

床面：南西隅の堆積土の残っていた部分にのみ認められた。他は削平のために明確な面をとらえることができなかった。残存する床面は、東西約1.4ｍ、南北約1.6ｍの範囲である。なお、床面の検出された部分では地山を床としており、貼床等は認められなかった。

周溝：南辺と西辺に認められた。南辺では約2.6ｍ、西辺では約2.4ｍの長さで残存していた。周溝は、幅が上端で約12㎝、底面で約５㎝、床面からの深さが約５㎝であり、断面形は「Ｕ」定形である。

柱穴：住居跡と考えられる範囲内から２個のピットが検出された。いずれも柱痕跡は認められず、配置等にも規則性が認められない。したがって、本住居跡の柱穴については不明である。

カマド：住居跡全体が削平を受けており、不明である。

出土遺物：床面・周溝・堆積土から土師器甕の破片が出土している。

〔床面〕（第５表）

体部破片が１点出土している。外面はヘラケズリされているが、内面の器面調整は磨滅のため不明である。

〔周溝〕（第５表）

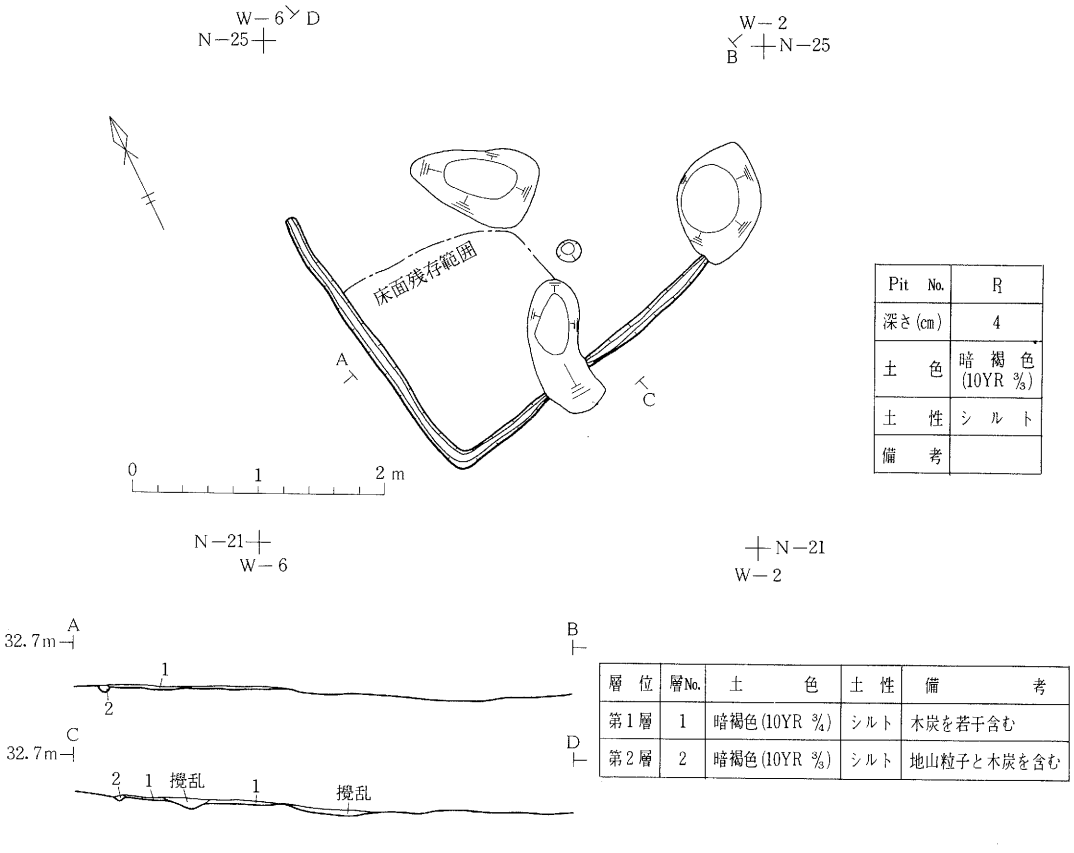
堆積土から出土している。体部破片であるが、内外面とも磨滅のため器面調整は不明である。

〔堆積土〕（第５表）

口縁部破片１点と体部破片８点が出土している。口縁部破片は外面がヨコナデされているが内面の器面調整は不明である。体部破片には，外面の器面調整がヘラケズリで内面が不明なもの、外面が平行のタタキのちヘラケズリで内面がハケ目のものがある。また、内外面の器面調整が不明なもののうち、内面が黒色処理されているのも１点ある。

第5表　第 4 住 居 跡 出 土 土 器 破 片

			技　　法	床　面	周　溝	堆積土1層	計
土師器	甕	口縁部	ヨコナデー不明			1	1
		体部	ケズリー不明	1		1	2
			タタキ→ケズリーハケ目			1	1
			不　明ー不明(黒色)			2	2
			不　明ー不　明		1	4	5
計				1	1	9	11



Pit No.	R
深さ(cm)	4
土　色	暗褐色(10YR 3/3)
土　性	シルト
備　考	

層位	層No.	土　色	土性	備　考
第1層	1	暗褐色(10YR 3/4)	シルト	木炭を若干含む
第2層	2	暗褐色(10YR 3/3)	シルト	地山粒子と木炭を含む

第11図　第 4 住 居 跡

3．土壙とその出土遺物

遺構の確認：H－20区に位置し、第３住居跡の輪郭内で確認された。確認面は、大部分が地山面であるが、一部は第３住居跡の周溝堆積土の上面である。

重複：第３住居跡と重複関係にある。第３住居跡の周溝堆積土を切って本土壙が掘り込まれていることから、本土壙が新しい。

平面形・規模：軸長約70cmの円形である。

堆積土：２層認められた。第１層は暗褐色（10YR 3/4）シルトに地山ブロック（黄橙色－10YR 8/6）を多量に含む層である。第２層は黒褐色（10YR 3/2）シルトに地山ブロックを多く、焼土・木炭をわずかに含む層である。層の状態や層の堆積状況などから判断して、これらの層は人為的に埋められたものと考えられる。

壁：大部分が地山、一部では第３住居跡の周溝堆積土を壁としている。壁の高さは約12cmである。壁の立ち上がりはゆるやかである。

底面：地山を底面としている。底面はほぼ平坦である。

出土遺物：堆積土から土師器坏・甕の破片が出土している。

〔**堆積土**〕（第６表）

土師器坏の破片は、外面の器面調整は不明であるが、内面はヘラミガキされ黒色処理されている。土師器甕の破片は、外面の調整についてはすべて不明であり、内面も不明のものが多いが、内面がナデ調整のものが１点ある。

第6表　土壙出土土器破片

			技　　法	堆積土１層	堆積土２層	計
土師器	坏	体部	不　明－ミガキ(内黒)	1		1
	甕	体部	不　明－ナ　デ		1	1
			不　明－不　明	3		3
計				4	1	5

4．焼土遺構

遺構の確認：発掘区の北西隅、N－42・43区の地山面で確認された。

重複：認められない。

平面形・規模：長軸約200 cm、短軸約154 cmの楕円形である。

堆積土：３層認められた。第１層は黒褐色（10YR 3/2）シルトで木炭を含む層である。遺構のほぼ中央部に堆積している。第２層は黒褐色（10YR 2/2）シルトで木炭を多量に含む層

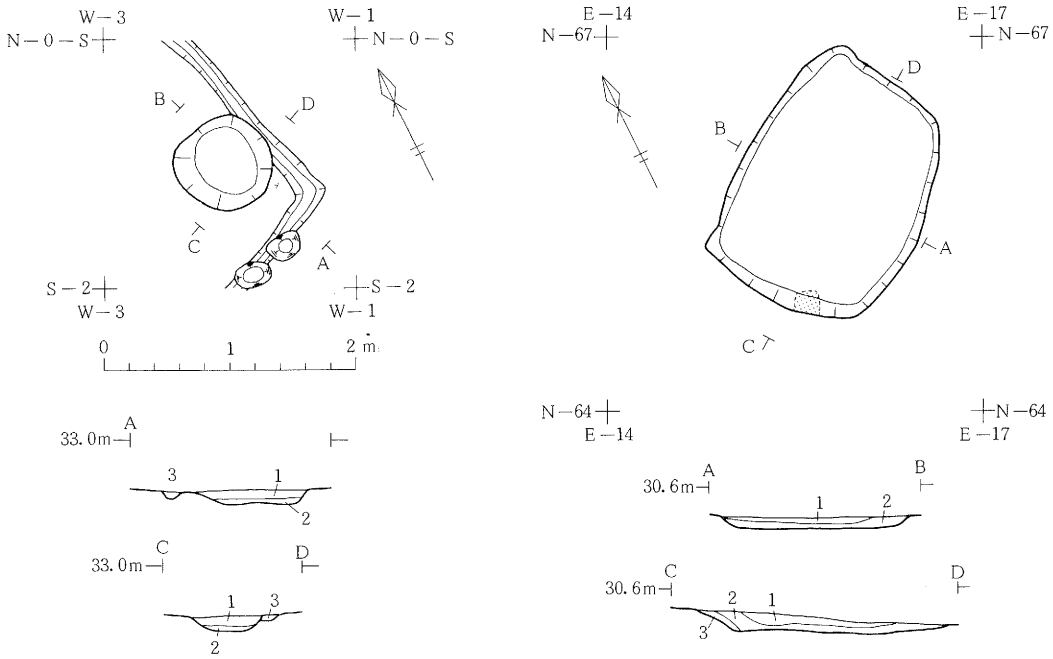
である。遺構の底面上に堆積している。第３層は黒褐色（10YR 2/2）シルトで焼土・木炭を含む層であり、壁沿いに堆積している。

壁：地山を壁としている。壁高は最も保存の良好な南側で約16cm、北側で約４cm、東側と西側の壁は北側に行くにつれてその高さを減じている。壁の立ち上がりはゆるやかである。

底面：地山を底面としている。底面はほぼ平坦である。

使用痕跡：北側壁のやや東寄りの部分で、壁から底面にかけての範囲に火熱を受けた痕跡が認められた。

出土遺物：全く出土していない。



層　　位	層No.	土　　色	土 性	備　　考
第 1 層	1	暗褐色(10YR 3/4)	シルト	地山(黄橙色10YR 6/6)ブロックを多く含む
第 2 層	2	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	焼土・木炭をわずかに含む。地山ブロックも含む
第３住周溝	3	暗褐色(10YR 3/3)	シルト	

層 位	層No.	土　　色	土 性	備　　考
第１層	1	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	木炭を含む
第２層	2	黒褐色(10YR 2/2)	シルト	木炭を多量に含む
第３層	3	黒褐色(10YR 2/2)	シルト	焼土・木炭を含む

第12図　土壙・焼土遺構

5．遺構以外の出土遺物

基本層位第Ⅰ層・第Ⅲ層および造成直後に佐々木徳雄氏・佐藤信行氏によって採集された遺物である。

イ．基本層位第Ⅰ層からの出土遺物

土師器坏（第13図１・２、第７表）

第13図１は口縁部・体部の一部が残っている。体部から口縁部にかけて外傾する。体部外面には沈線状の段を有する。器面調整は、外面が段の上はヘラミガキ、段の下は磨滅のため不明、内面がヘラミガキされ黒色処理されている。

第13図２は佐々木徳雄氏の採集品と接合された。体部上半と口縁部が欠損している。丸底である。体部・底部外面はヘラケズリされているが、磨滅のためその後の調整については不明である。体部・底部内面はヘラミガキされ黒色処理されている。

その他、図化できなかった破片の観察結果は第７表に示した。いずれも製作においてロクロを使用した痕跡は認められない。磨滅のため器面調整の不明なものを除けば、すべて内面がヘラミガキされ黒色処理されている。外面の器面調整は、口縁部がヘラミガキされているもの・体部はヘラケズリされ、その後ヘラミガキされているもの・磨滅のため不明なもの・底部はヘラケズリされているもの・その後の調整が不明なものなどがある。

土師器甕（第13図３・４、第７表）

第13図３は口縁部・体部の一部が残っている。小形の甕と思われる。頸部でわずかに外反して短い口縁部がつく。口縁端部は丸味をもつ。器面調整は、磨滅のため内外面とも不明であるが、体部外面にハケ目かと思われるような痕跡がかすかに観察される。

第13図４は口縁部・体部の一部が残っている。製作においてロクロを使用している。頸部で大きく外反し口縁部につづく。口縁端部は平坦であり、その面に２条の細い沈線がめぐる。器面調整は、外面が頸部に接する付近の体部上半で平行のタタキ目、体部内面にはハケ目が施されている。

その他、破片の観察結果については第７表に示した。口縁部の器面調整は、磨滅のため不明のものを除けば内外面ともヨコナデだけである。内面黒色処理された破片が２点ある。体部の器面調整は、外面がヘラケズリされているものが圧倒的に多い。ヘラケズリの前に平行のタタキ目が施される例もある。内面にはミガキ・ヨコナデ・ナデ・ハケ目・ヘラナデなどの調整がみられるが、ナデ調整のものが多い。なお、内面黒色処理された破片もある。底部はすべて平底である。磨滅のため内外面の調整は不明である。

須恵器坏（第13図５、第７表）

第13図５は約⅔欠損している。体部・口縁部は外傾している。底部切り離し技法は回転ヘラ

切りによっている。体部・底部とも再調整は認められない。底部から体部にかけての外面には火だすきの痕跡が認められる。

体部破片としては、内外面ロクロ調整されたものがある。底部破片には回転ヘラ切りで切り離されたものがある。

須恵器高台付坏（第７表）

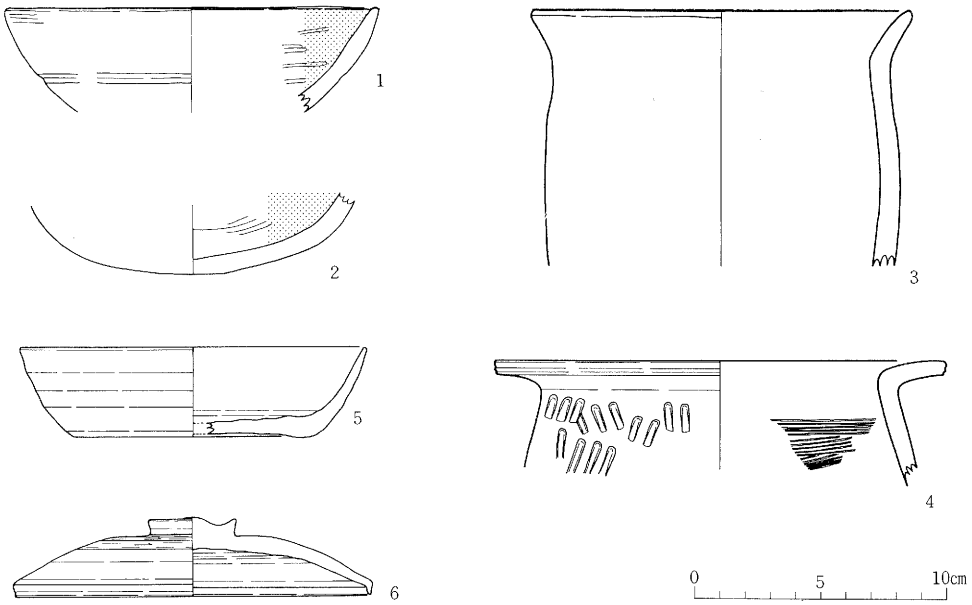
磨滅のため底部切り離し技法等は不明である。高台と坏部の境には細い沈線がめぐっている。色調は内外面、断面とも赤橙色を呈しており、赤焼土器かもしれない。

須恵器蓋（第13図６）

佐藤信行氏採集のものと接合された。つまみは宝珠形であり、周縁より中央がわずかに高い山状になっている。天井部外面は、つまみに近い部分が回転ヘラケズリされている。かえりは天井部端からほぼ直下に折り曲げられており、断面形はほぼ三角形である。

須恵器甕（第７表）

いずれも体部破片だけである。破片の断面を観察すると薄手のものと厚手のものがみられる。薄手のものは内外面ともロクロ調整されている。厚手のものは、外面が平行のタタキ目で内面が平行のアテ目のものや、内外面が不定形に押さえられた痕跡（便宜的に外面をタタキ目、内面をアテ目と呼ぶ）のものがある。



第13図　基本層位第Ⅰ層からの出土遺物

第7表　基本層位第Ⅰ・Ⅲ層および層位不明の土器破片

種別	器形	部位	器面調整 外面—内面	Ⅰ層	Ⅲ層	Ⅹ層	計
土師器	坏	口縁部	ミガキ—ミガキ（黒色）	1			1
		体部	ケズリ→ミガキ—ミガキ(黒色)	1			1
			ケズリ＋？—ミガキ（黒色）	2			2
			不　明—ミガキ（黒色）	4		2	6
			不　明—ミガキ？（黒色）	1			1
		底部	ケズリ＋？—ミガキ（黒色）	1			1
			ケズリ—不明（黒色）	1			1
			不　明—ミガキ（黒色）	1			1
	甕	口縁部	ヨコナデ—ヨコナデ	3			3
			ヨコナデ—不　明	1			1
			不　明—ヨコナデ	2			2
			不　明—不明（黒色）	2			2
			不　明—不　明	15			15
		体部	ケズリ—ミガキ	1			1
			ケズリ—ヨコナデ	1			1
			ケズリ—ヘラナデ	1			1
			ケズリ—ナ　デ	9			9
			ケズリ—ハケ目	2			2
			ケズリ—不明（黒色）	3		1	4
			ケズリ—不　明	21		2	23
			タタキ→ケズリ—ハケ目	1			1
			タタキ→ケズリ—不明	1			1
			タタキ—不　明			1	1
			ハケ目—ヘラナデ			1	1
			ハケ目—ナ　デ	1			1
			ハケ目—ハケ目		2		2
			ハケ目—不　明	1	1		2
			ナ　デ—不　明	1			1
			不　明—ミガキ（黒色）	1			1
			不　明—ハケ目	1			1
			不　明—ヨコナデ	1			1
			不　明—ナ　デ	9	1	3	13
			不　明—不明（黒色）	8			8
			不　明—不　明	138	2	16	156
		底部	不　明—不　明	13			13
計				249	6	26	281

種別	器形	部位	器面調整 外面—内面	Ⅰ層	Ⅲ層	Ⅹ層	計
須恵器	坏	体部	ロクロ調整—ロクロ調整	1			1
			不　明—不　明	1			1
		底部	回転ヘラ切り	1			1
			不　明	1			1
	高付台坏	底部	不　明	1			1
	甕	体部	タタキ(平行)—アテ目(平行)	1			1
			タタキ(平行)—アテ目	1			1
			タタキ—アテ目	2			2
			ロクロ調整—ロクロ調整	3			3
			不　明—ロクロ調整	1			1
			不　明—オサエ	1			1
計				14			14

ロ．基本層位第Ⅲ層からの出土遺物

土師器甕（第７表）

いずれも体部破片である。器面調整は、内外面ハケ目、外面がハケ目で内面が不明なもの、外面が不明で内面がナデなものなどがある。

ハ．出土地点・層位の不明な遺物

土師器坏（第７表）

いずれも体部破片である。製作に際し、ロクロは使用されていない。器面調整は、外面が磨滅のため不明であるが、内面はヘラミガキされ黒色処理されている。

土師器甕（第７表）

いずれも体部破片である。器面調整は、外面がヘラケズリで内面が不明なもの、外面がハケ目で内面がヘラナデのもの、外面がタタキ目で内面が不明なもの、外面が不明で内面がナデのものなどがあれ。なお、外面がヘラケズリで内面が不明なもののうち１点は内面黒色処理されている。

ニ．佐々木・佐藤両氏によって採集された遺物

土師器坏（第14図１、第８表）

第14図１は約¼残っている。底部はやや丸味をもつ平底で、体部から口縁部にかけて外傾する。外面の体部下端には段が認められる。それに対応する内面にもかすかに段状の痕跡がみられる。外面の器面調整は、底部から体部にかけてヘラケズリされているが、その後の調整は磨滅のため不明である。内面はヘラミガキされ黒色処理されている。

破片についてみると、外面の器面調整は磨滅のためすべて不明である。内面はヘラミガキされ黒色処理されている。

土師器甕（第14図２・３、第８表）

第14図２は器高が口径より大きい長胴形の甕である。頸部には段がみられ、体部と区画している。口縁部は外反気味に外傾しており、長い。口縁端部は摩滅している。器面調整は、口縁部内外面とも摩滅のため不明、体部外面はヘラケズリ、体部内面はハケ目である。

第14図３は体部下半・底部が欠損している。直立気味な体部から外反する口縁部につづいている。頸部には体部と区画する段などはみられない。口縁部は長く、口縁端部は平坦である。器面調整は、口縁部外面がヨコナデ、体部外面がヘラケズリ、内面は口縁部から体部にかけて磨滅のため不明である。

次に破片についてみる。口縁部は外面がヨコナデのもの、内面がヨコナデのものがある。体部外面がヘラケズリで内面がハケ目のもの・不明のもの、外面がハケ目で内面が不明なもの、外面がタタキ目のちナデで内面がナデのもの、外面が不明で内面がナデのものなどがある。体

部外面はヘラケズリのものが多い。底部はすべて平底であるが、外面に木葉痕のものが1点、それ以外は磨滅のため器面調整は不明である。

須恵器坏（第14図4、第8表）

第14図4は体部だけ残存している。高台付坏の坏部と思われる。体下部で屈曲し、外反気味に口縁部につづく。屈曲部の稜はあまり顕著ではない。屈曲部を境として、体部外面の器面調整に違いがみられる。体部下半が回転ヘラケズリ、体部上半がロクロ調整されている。内面はロクロ調整されている。

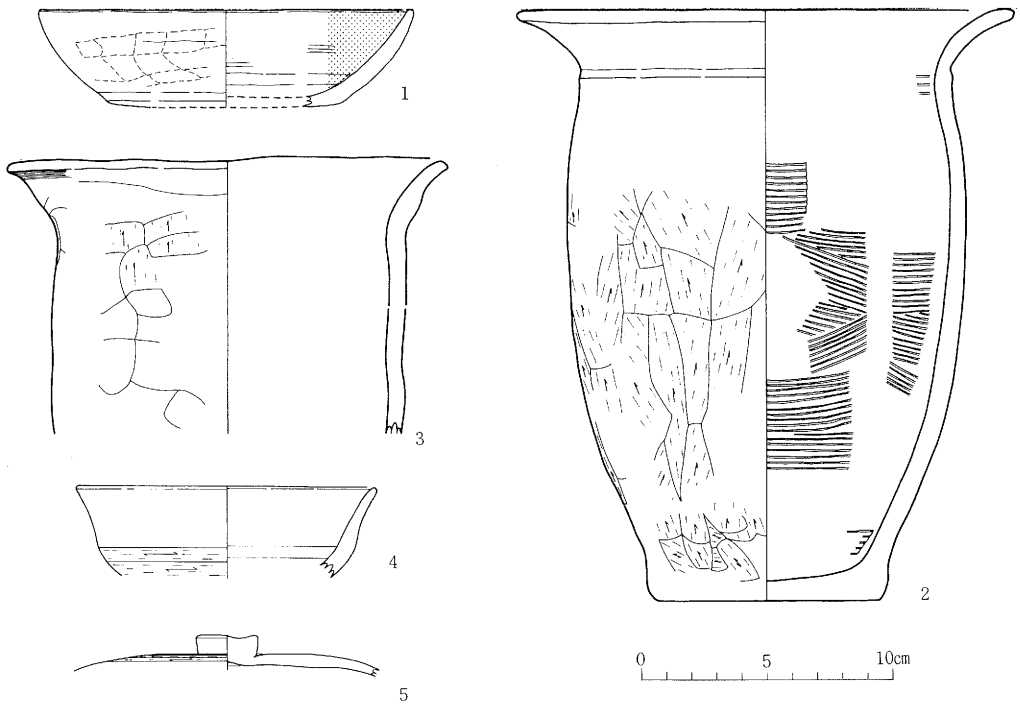
その他、底面破片が1点あり、その切り離し技法は回転ヘラ切りである。

須恵器甕（第8表）

体部と底面の破片がある。体部の器面調整は、内外面ロクロ調整のもの、外面が平行タタキ目で内面がアテ目のもの・不明のもの、外面が不明で内面がロクロ調整のものなどがある。底部の切り離しは、剝落のため不明である。

須恵器蓋（第14図5）

口縁部が欠損している。宝珠形のつまみをもつ。つまみの中央部と周縁の高さがほぼ同じである。天井部はかなり平坦であり、つまみに近い部分が回転ヘラケズリされている。つまみ部と天井部の接合部分は凹んでいる。



第14図　佐々木・佐藤両氏の採集遺物

第8表　佐々木・佐藤両氏の採集遺物

種別	器形	部位	器面調整 外面——内面	
土師器	坏	口縁部	不明——ミガキ（黒色）	2
		体部	不明——ミガキ（黒色）	2
			不明——不明（黒色）	1
		底部	不明——ミガキ（黒色）	3
			不明——不明（黒色）	1
	甕	口縁部	ヨコデナ——不明	2
			不明——ヨコデナ（黒色）	1
			不明——ヨコデナ	1
			不明——不明	2
		体部	ケズリ——ハケ目	12
			ケズリ——不明（黒色）	2
			ケズリ——不明	6
			タタキ→ナデ——ナデ	1
			ハケ目——不明	1
			不明——ナデ	4
			不明——不明	62
		底部	木葉痕	1
			不明	8
須恵器	坏	底部	ヘラ切り	1
	甕	体部	タタキ（平行）——アテ目	2
			タタキ（平行）——不明	1
			ロクロ調整——ロクロ調整	3
			不明——ロクロ調整	1
			不明——不明	2
		底部	不明	1
計				123

V　遺構・遺物に関する考察と問題点

1．住居跡の構造

住居跡は、それを構成する要素（平面形・周溝・床面・柱穴・カマドなど）が有機的に結合したものである。ここでは、本遺跡で発見された住居跡について各要素を通して、その構造について検討する。

平面形・規模：住居跡はすべて方形を基調としている。そのうち、住居跡の輪郭がほぼとらえうる第１・２住居跡は正方形である。次に、規模についてみると、第１住居跡が一辺約3.6ｍ、第２住居跡が一辺約3.4ｍである。また、それらの面積は第１住居跡約13㎡、第２住居跡約11.6㎡である。

壁：削平のため残存状態はよくない。壁の残っている第１・２・４住居跡では、すべて地山を壁としている。

床面：削平のため残存状態はよくない。床面の残っている第１・２・４住居跡では、すべて地山を床面としており、住居跡掘り方底面が床面となっている。

周溝：すべての住居跡には周溝がみられた。しかし、第２住居跡では全周するものではなく部分的にみられた。他の住居跡については、削平のため全周するかどうか不明である。

柱穴：各住居跡に伴うと思われる柱穴については明らかにできなかった。そのうち、床面の完全に残っている第２住居跡については、柱穴が存在しなかった可能性がある。

カマド：第２住居跡で検出された。その他の住居跡では削平のため検出できなかった。したがって、ここでは第２住居跡のカマドを中心にして述べる。

〔**位置**〕北辺の壁にとりついている。また、第１住居跡の焼面がカマド燃焼部底面とすれば第１住居跡のカマドも北辺の壁にとりついていることになる。

〔**構造・機能**〕カマドは多くの場合、住居内にあって側壁・奥壁と天井に囲まれた部分と、そこから住居外にトンネル状に延び、その先端がピット状になる部分からなっている。第２住居跡では削平のため前者の部分しか残っていない。しかも、天井部は崩落し、その土は左右の側壁内に堆積していた。

第２住居跡の側壁と奥壁に囲まれて皿状に凹んでいる部分、そのうち両側壁内面・凹部底面は火燃を受けて赤変しており、ここが燃焼部と考えられる。なお、凹部でも前方にくるにつれて、火燃を受けた痕跡は微弱になってくる。また、一般には住居外にトンネル状に延びている部分は煙道、その先端のピット状のものは煙出しの部分と考えられている。

〔**構築方法**〕第２住居跡のカマドは、燃焼部しか残っていないことやその構築方法についてもすでに述べた。重複するところもあるが、その概略について述べる。なお、煙道・煙出し部

も残っていたとしてそれも（　　）で加えてみる。

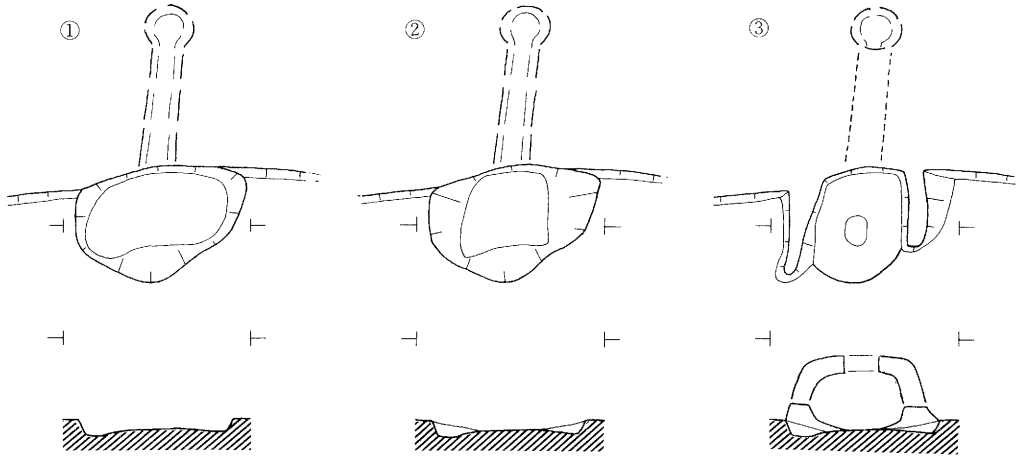
① 燃焼部（煙道・煙出し部）の掘り方を掘る。② 燃焼部側壁の下にあたる部分に土を埋める。③ その土の上に側壁をのそ、天井を構築する。

以上のような構築手順が考えられる。

貯蔵穴状ピット：第２住居跡の北東隅、カマドのすぐ東側で検出された。堆積土には多量の焼土・木炭が含まれているが、このピットの壁や底面には火熱を受けた痕跡は認められない。遺物としては、体部上半の欠損した土師器甕が堆積土中から出土している。このことから、この貯蔵穴状ピットは貯蔵のためのピットではなく、カマドからかき出した焼土や灰などを入れるためのピットである可能性がある。

これまで検討してきた結果をまとめると、次のようになる。

本遺跡で発見された住居跡は、方形を基調とした平面形をもち、周溝を有している。壁や床面は、住居掘り方の壁および底面をそのまま壁・床面として使用している。柱穴については明らかにできなかったが、第２住居跡においては初めから柱穴を掘らない可能性が考えられた。カマドについては、削平のため第２住居跡を除いて明らかにできなかった。第２住居跡のカマドでさえ、煙焼部天井や煙道・煙出し部はすでに失われていた。第２住居跡のカマド燃焼部は壁に造り付けられていた。



第15図　カマド構築方法の模式図

2．出土土器の分類

出土土器には土師器と須恵器がある。これらの遺物について観察し、実測図の作成できたものを中心として検討を加える。

〔**土師器**〕　土師器には坏・甕がある。

坏：実測図の作成できたものは4点ある。それらは、すべて製作に際しロクロを使用していない。底部の形態によって三類に分類される。

A類　丸底のもの。

B類　平底のもの。

C類　底部欠損のため底部形態が不明のもの。

〈**坏A類**〉　底部が丸底のものである。体上部以上が欠損しており、体部に段などがつくかどうか不明である。器面調整は、外面は磨滅しているが、底部から体部までヘラケズリされ、その後ヘラミガキされているようである。内面はヘラミガキされ、黒色処理されている。

〈**坏B類**〉　底部が平底のものである。体下部に段のつくものをBⅠ類、体部と底部の境に段のつくものをBⅡ類とする。

BⅠ類　体下部に段のつくものである。体部から口縁部にかけて外傾する。器面調整は、外面は口縁部から段の部分までヘラミガキ、段から下の部分がヘラケズリされているが、磨滅のためその後の調整については不明である。内面はヘラミガキされ黒色処理されている。

BⅡ類　体部と底部の境に段をもつものである。体部はやや内弯気味に外傾する。器面調整は内外面ともヘラケズリされているが、その後の調整については磨滅のため不明である。なお内面は黒色処理されている。

底部破片は7点あり、すべて平底である。そのうち、体部と底部との境に段をもつものは1点である。他の6点については、体部に段または沈線をもつものか、それらをもたないものかは不明である。器面調整は、底部外面がヘラケズリのもの、ヘラケズリ後の調整が不明なものなどがある。内面はすべてヘラミガキされ黒色処理されている。

〈**坏C類**〉　本来はA類かB類に含まれるものである。体部に段がつく。器面調整は、外面は口縁部から段の上までヘラミガキ、段から下は磨滅のため不明、内面はヘラミガキされ黒色処理されている。

土師器坏分類表

	底　部	段・沈線の有無
ロクロ非使用	A．丸　底	体部に段・沈線の有無は不明
	B，平　底	Ⅰ．体下部に段あり
		Ⅱ．体部と底部の境に段あり
	C．不　明	体部に段あり

甕：実測図の作成できたものは7点ある。そのうち、全体形のわかるものは1点だけである。これらの甕には、製作に際してロクロを使用したものと使用していないものとがある。

A類　製作に際してロクロを使用しないもの。

B類　製作に際してロクロを使用したもの。

〈甕A類〉　製作に際してロクロを使用していないものである。すべて最大径は口縁部にある。頸部に段をもち、口縁部と体部を区画するもの（AⅠ類）と、段などがなく体部から口縁部になだらかに移行するもの（AⅡ類）とがある。

AⅠ類　口縁部が外反気味に外傾している。器面調整は、体部外面はヘラケズリ、体部内面はハケ目が施されている。

AⅡ類　口縁部はすべて外傾している。体部が丸味をもつもの（a）と直線的なもの（b）とがある。AⅡa類の器面調整は磨滅のため内外面ともほとんど不明であるが、わずかに内面が黒色処理されていることがわかる。AⅡb類の器面調整は磨滅のため内外面不明のものが多いが、体部外面にヘラケズリやハケ目（？）が施されたものもある。

甕の破片についても観察した。ロクロを使用したと思われる破片は観察されなかった。器面調整には、口縁部は外面にヨコナデ、内面にヨコナデがある。体部外面にはヘラケズリ・タタキ目のちヘラケズリ、ハケ目などがあり、ヘラケズリのものが最も多い。体部内面にはヘラミガキ、ナデ、ヘラナデ、ハケ目などがあり、ナデとハケ目のものが多い。

〈甕B類〉　製作に際してロクロを使用したものである。頸部に段などは認められないが、頸部で大きく屈曲して口縁部につづく。体部の器面調整は、外面には上部にタタキ目、内面にはハケ目が施されている。

破片の中では、体部外面がタタキ目ののちナデ、内面のナデ調整されているもの1点が、あ

るいはロクロ使用のものかもしれない。

土師器甕分類表

	頸　部	体　部
A．ロクロ非使用	Ⅰ．段あり	
	Ⅱ．段なし	a．丸味をもつ b．直線的
B．ロクロ使用	段なし	

〔須恵器〕　須恵器には坏・甕・蓋などがある。出土量は少ない。

坏：器形は体部から口縁部にかけて外傾する。底部の切り離し技法をみると、回転ヘラ切りのもの（A類）と再調整のため不明のもの（B類）がある。

なお、体部で屈曲し、その部分に稜のあるものは高台付坏と考えられる。

甕：出土量も少なく、図示できるものもない。したがって分類することは困難である。

蓋：2個出土している。ともに宝珠状のつまみをもつ。天井部外面には、回転ヘラケズリの再調整が加えられている。つまみ中央部が周縁より高いもの（A類）と高さが同じなもの（B類）がある。A類はつまみ部と天井部との接合部分が平担であるのに対して、B類は凹んでい

3．出土土器の年代

本遺跡で発見された土器は、遺跡全体が造成時にかなり削平されているため、その共伴関係を把握することは第２住居跡を除いて困難である。そこで、ここでは他遺跡出土の土器などとの比較において、その年代を検討してみたい。

土師器坏にはＡ・Ｂ・Ｃ類がある。器形では丸底・平底、段の有無などの相違はみられるがこれらはいずれも製作においてロクロを使用していない。また、器面調整では外面がヘラミガキやヘラケズリののちヘラミガキ、内面がヘラミガキされ黒色処理されている。このような特徴をもつ土器は、志波姫町糖塚遺跡（宮城県教育委員会：1978）・金成町佐野遺跡（宮城県教育委員会：1975）・迫町対馬遺跡（加藤・伊藤：1955、小井川・高橋：1977）・ 田尻町天狗堂遺跡（田尻町教育委員会：1978）などから出土しており、これらは国分寺下層式（氏家：1967）とされている。

土師器甕Ａ類としたものは、製作に際してロクロを使用しないものである。また、口縁部に最大径をもつものである。頸部の段の有無によってＡⅠ類、ＡⅡ類とした。このような特徴をもつ甕は、糠塚遺跡・天狗堂遺跡・対馬遺跡などで、国分寺下層式の坏に伴うことが確かめられている。また、大河原町台ノ山遺跡（宮城県教育委員会：1973）では、国分寺下層式と表杉ノ入式（加藤：1954、氏家：1957）に、本遺跡では、第２住居跡においてＢ類の上師器坏と伴っていることから、国分寺下層式に伴っていることは確実である。

土師器甕Ｂ類としたものは、製作に際してロクロを使用しているものである。このような特徴をもつ甕は、糠塚遺跡では表杉ノ入式の坏と伴い、築館町伊治城跡（宮城県多賀城跡調査研究所：1978）では国分寺下層式の坏と伴っている。

須恵器坏には、底部切り離し技法がヘラ切りのもの（Ａ類）と再調整のため不明なもの（Ｂ類）とがある。糠塚遺跡ではＡ・Ｂ類とも国分寺下層式、台ノ山遺跡などでは表杉ノ入式の土師器とも伴うことが確かめられている。なお、Ａ類は岡田・桑原（岡田・桑原：1974）の第６—ｂ類に相当し、８世紀末～９世紀後半頃の年代が考えられている。

高台付坏と思われるものと類似したものは、日の出山窯跡（宮城県教育委員会：1970）から出土している。また、糠塚遺跡では国分寺下層式や表杉ノ入式の土師器に伴っている。

須恵器蓋についてみると、糠塚遺跡では国分寺下層式の土師器にＢ類、表杉ノ入式の土師器とＡ・Ｂ類が伴出している。伊治城跡では国分寺下層式の坏と同年代を与えている。

ここで、これまで述べてきたことを要約すると次のようになる。

① 本遺跡出土の土師器坏は国分寺下層式と考えられる。

② 土師器甕Ａ類は国分寺下層式や表杉ノ入式の土師器と伴うことが確認されている。

③ 土師器甕Ｂ類は国分寺下層式の坏、表杉ノ入式の土師器と伴うことが確認されている。

④　須恵器坏・蓋は国分寺下層式や表杉ノ式の土師器と伴うことが確認されている。

以上のことから、本遺跡出土の土器はおおよそ土師器でいう国分寺下層式期・表杉ノ入式期に属するものと言えよう。

これらの年代は、一般に国分寺下層式８世紀、表杉ノ入式９～10世紀とされている（宮城県多賀城跡調査研究所：1978）。

４．遺構の年代

出土土器や遺構の重複などから遺構の年代を検討すると次のようになる。

国分寺下層式期と考えられるもの……第２住居跡

国分寺下層式期あるいは表杉ノ入式期のもの……第１・４住居跡

不明なもの……第３住居跡、土壙、焼土遺構

第１・４住居跡については、床面から土師器甕しか出土しておらず、この甕は国分寺下層式・表杉ノ入式の土師器と伴出することからいずれとも判断できない。

第３住居跡を時期不明としたのは、推定される住居跡範囲内のピットから土師器甕の破片が出土しているが、このピットが第３住居跡に伴うという確証が得られないためである。しかし次の土壙で述べることなどから、国分寺下層式期もしくは表杉ノ入式期の可能性がある。

土壙については、その重複関係から第３住居跡より新しいことは明らかである。堆積土からロクロを使用しない土師器坏の破片や甕の破片が出土している。坏の破片について国分寺下層式、甕の破片については国分寺下層式または表杉ノ入式に含まれるものと考えられる。しかも堆積土は人為的に埋められたと判断されるところから、本土壙は国分寺下層式もしくは表杉ノ入式以前と推定される。

焼土遺構については遺物が全く出土していないため不明である。

Ⅵ　まとめ

今回の調査で得られた成果を要約すると、次のようになる。

１．遺跡は東に向って延びる小起伏丘陵上に立地している。

２．遺構としては、奈良・平安時代（国分寺下層式期・表杉ノ入式期）と考えられる竪穴住居跡４件、同時代と考えられる土壙１基、時期不明の焼土遺構１基が発見された。

３．これらのことから、本遺跡は奈良・平安時代の集落跡と考えられる。

４．遺跡の範囲は、今回の発掘区の東・西・南にさらに延びることが予想される。

第16図　長者原Ⅱ遺跡地形図

引用・参考文献　　（アイウエオ順）

阿部義平（1968）：『東国の土師器と須恵器』帝塚山考古学№1

氏家和典（1957）：『東北土師器の型式分類とその編年』「歴史第14輯」東北史学会

（1961）：『陸奥国分寺跡ー土器』所収「陸奥国分寺跡発掘調査委員会編」

（1967）：『陸奥国分寺跡出土の丸底杯めぐって』「山形県の考古と歴史」柏倉亮吉教授還暦記念論文集刊行会

岡田茂弘・桑原滋郎（1974）：『多賀城周辺における古代杯形土器の変遷』「宮城県多賀城跡調査研究紀要Ⅰ」

小山正忠・竹原秀雄（1967）：『新版標準土色帖』

加藤孝（1954）：『塩釜市表杉ノ入貝塚の研究』「宮城学院女子大学研究論文集Ⅴ」

加藤孝・伊藤玄三（1955）：『宮城県登米郡新田村字対馬竪穴住居址群』登米郡新田村史

木本元治（1978）：『下原遺跡７号ピット出土の土器について』「しのぶ考古７」

興野義一（1960）：『宮城県達田郡田尻町出土古瓦の問題点』「歴史考古６」

工藤雅樹・桑原滋郎（1972）：『東北地方における古代土器生産と展開』「考古学雑誌第57巻第３号」

桑原滋郎（1969）：『ロクロ土師器杯について』「歴史第39輯」東北史学会

（1976）：『東北北部および北海道の所謂第Ⅰ型式の土師器について』「考古学雑誌第61巻第４号」

栗原郡藤里村誌編纂委員会（1922）：『藤里村誌』

小井川和夫・高橋守克（1977）：宮城県対馬遺跡出土の土器』「宮城史学第５号」

瀬峰町（1966）：『瀬峰町史』

瀬峰町教育委員会（1977）：『かんげつ遺跡』「宮城県瀬峰町文化財調査報告書第１集」

（1978）：『瀬峰町長者原遺跡現地説明会資料』

田尻町教育委員会（1978）：『天狗堂遺跡』「田尻町文化財調査報告書第１集」

藤沼邦彦（1977）：『宮城県出土の中世陶器について』「東北歴史資料館研究紀要第３巻」

宮城県教育委員会（1970）：『日の出山窯跡群』「宮城県文化財調査報告書第22集」

（1973）：『東北新幹線関係発掘調査概報ー台の山遺跡』「宮城県文化財調査報告書第30集」

（1975）：『佐野遺跡』「宮城県文化財調査報告書第40集」

（1976）：『宮城県遺跡地名表』「宮城県文化財調査報告書第46集」

（1977）：『宮城県文化財発掘調査略報ー観音沢遺跡』「宮城県文化財調査報告書第53集」

（1978ーａ）：『宮城県遺跡地名表修正版』

（1978ーｂ）：『宮城県文化財発掘調査略報ー糠塚遺跡』「宮城県文化財調査報告書第53集」

宮城県多賀城跡調査研究所（1978）：『伊治城跡Ⅰ』「多賀城関連遺跡発掘調査報告書第３冊」

瀬峰町教育委員会

教育長	手島正夫
課長	鈴木恭和
主事	門脇正徳
社教指導員	鈴木琢郎
	門脇照子

瀬峰町公民館

館長	後藤東
主事	門脇正徳
主事補	品川節郎
〃	高橋達男
用務員	菅原みさ子

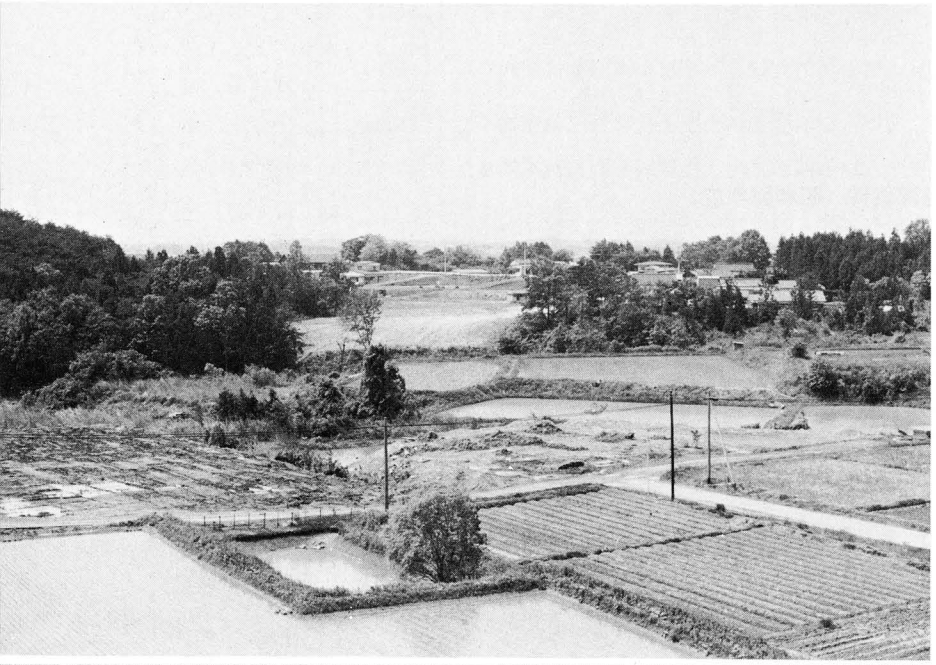
宮城県教育庁文化財保護課職員（昭和53年度）

課長	氏家和典
課長補佐	佐藤茂
〃 兼管理第2係長	扇正人
管理第1係長	加藤忠雄
主事	佐藤信子
〃	三浦正義
管理第2係主査	中田悌子
〃	渡辺正憲

調査第1係係長	高橋多吉
技術主査	早坂春一
技師	小井川和夫
〃	高橋守克
〃	丹羽茂
〃	斎藤吉弘
〃	千葉宗久
〃	真山悟
〃	阿部博志
〃	小野寺祥一郎
〃	小川淳一
嘱託	熊谷幹男

調査第2係係長	佐々木茂楨
技術主査	平沢英二郎
技師	佐々木安彦
〃	加藤道男
〃	遊佐五郎
〃	森貢喜
〃	太田昭夫
〃	阿部恵
〃	手塚均

1．遺跡遠景
（東より）



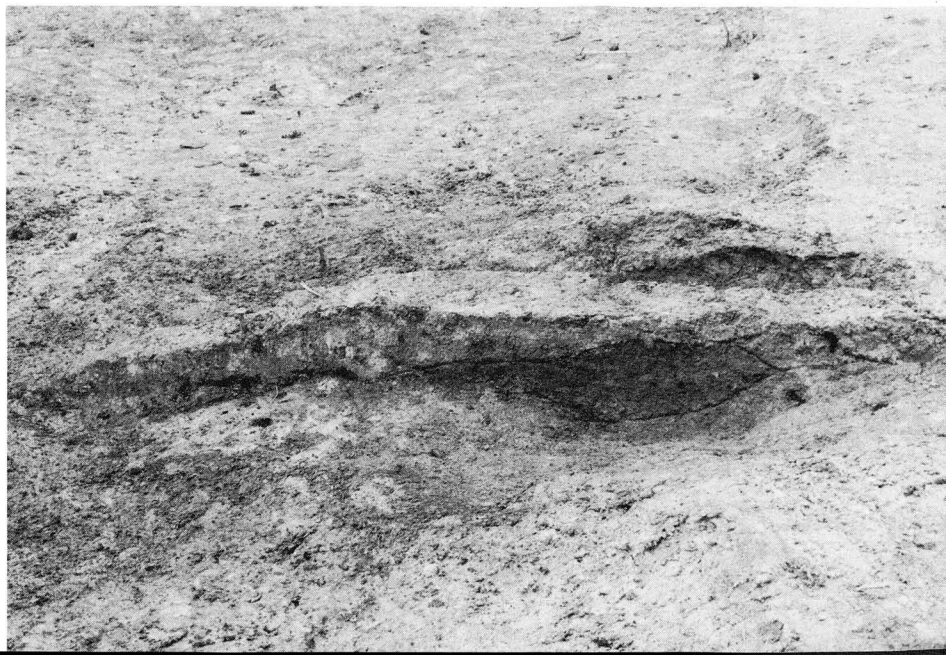
2．同　　上
（北より）

3．第1住居跡

図版 2

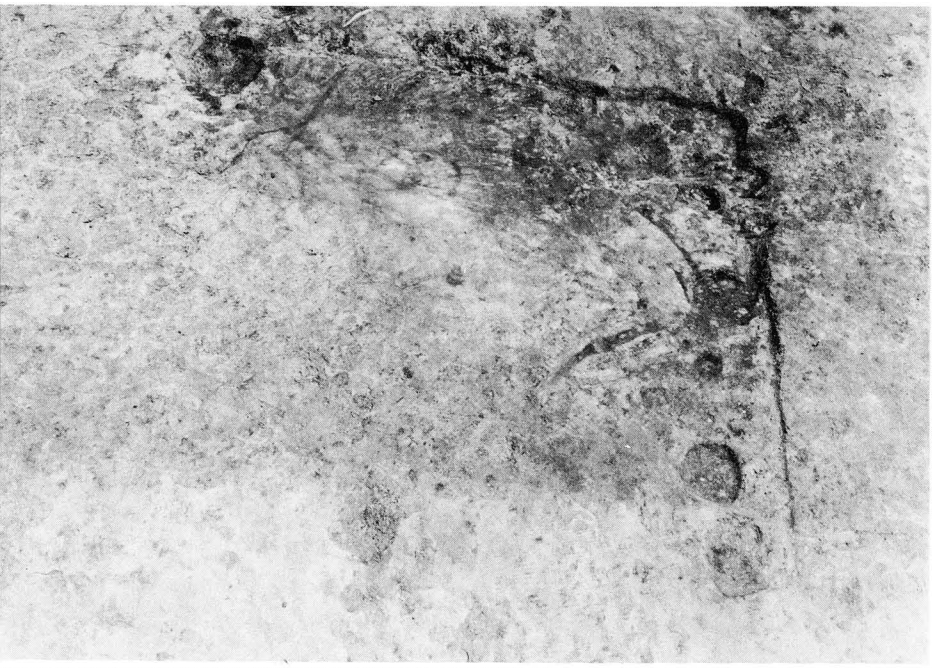
1．第２住居跡

2．同上カマド



3．同上カマド内
堆積土

1．第3住居跡



2．第4住居跡

3．焼土遺構

図版 4

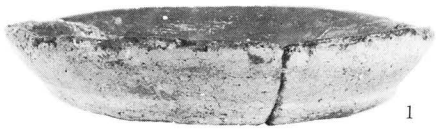
1．遺構検出の状況

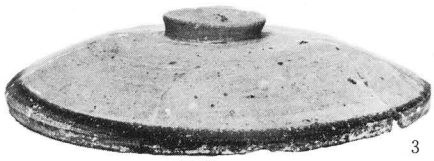
2．実測図作成の状況

3．発掘後の状況

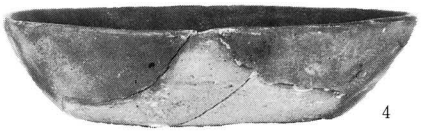
1．現地説明会の状況

2．発掘に参加した人々

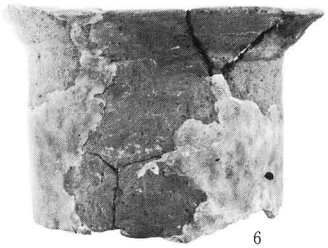

1


3

2


4

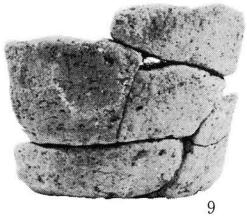
5


6

7

8

10


9

1．第９図１
2．第14図１
3．第13図６
4．第13図５
5．第14図２
6．第14図３
7．佐々木氏採集
8．第９図３
9．佐々木氏採集
10．佐々木氏採集
（縮尺不同）

図版６　出　土　遺　物

瀬峰町教育委員会は、焼土遺構から出土した木炭について放射性炭素年代測定を、学習院大学に依頼した。測定結果は以下の通りである。

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

１９７９年3月5日

瀬峰町教育委員会殿

1978年11月10日受領致しました試料についての^{14}C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線計数値の標準偏差σにもとづいて算出した年数で，標準偏差（one sigma）に相当する年代です。試料のβ線計数率と自然計数率の差が２σ以下のときは，３σに相当する年代を下限とする年代値（B.P.）のみを表示してあります。また試料の，β線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が２σ以下のときには，Modernと表示し，δ^{14}C%を付記してあります。

記

Code No.	試料	B.P.年代(1950年よりの年数)
GaK-7726.	Wood charcoal from Chyojahara, Ayase-mura.	１６００±９０ A.D.３５０

瀬峰町文化財調査報告書第２集

長　者　原　Ⅱ　遺　跡

昭　和　54　年　3　月

昭和54年３月25日　印刷
昭和54年３月31日　発行

発行　瀬　峰　町　教　育　委　員　会

印刷　株式会社　東　北　プ　リ　ン　ト
仙台市立町24－24　ＴＥＬ(63)1166